

71
2
157

百種
寸珍

霧漣

編四拾貳第

山山

文壇
獨逸

人人

共撰

大家列傳
全

東京
博文館藏版

Libb 1100

連山
霧山人
共撰

獨逸
文壇
大家列傳
全

東京
博文館藏版





氏クツトスブツロク



氏ドンラー井ウ



氏ガンシツレ



氏ルレルシ



氏ーテエゴ



氏ルデルヘ

緒言

マルチン、ルーテルが聖書の翻譯の、管に宗教上に大裨益を
與へたるのみならず、獨逸文學の萌芽の、蓋し爰に發したる
と云ふも不可なきなり。其後有名なる諸家相次て起り、宗教
的に社會的に詩歌小説を綴りて、大に文學の進歩を見るに
至りぬ。之れ則ち獨逸文學隆盛の第一期とす。雖然其間に現
れたる著作は、概ね他國(殊に佛國)より翻譯したる者にし
て、未だ之に依りて獨逸固有の風俗人情を見るに足らず、初
めて十八世紀に至りて、シロップストッフ、ウヰーランド、レッシン
グ、ヘルダール、ゴッテ、シルレルの六大家起り、専ら力を斯道の

爲に盡し、以て同國文學の振興を計れり。之を獨逸文學第二の隆盛時代とす。且つ夫れ此等の諸氏の前後相次て同時代に生れ、同じく文學の爲に力を盡せしと雖も、其長ずる處に至ては各々同しからざりき。彼のシロップストック氏とウッラランド氏との全國佛文學に心醉せる時に當りて、共に擾々たる荆棘を披きしかど、彼の眞摯嚴格ある筆を以て、直接に鄙猥なる佛國文學を退げんと欲し、此の艶麗洒落なる文を以て、暗に獨逸文學の獨立を計り、以て後進の士を誘導し、其進歩を安からしめたり。於是乎、レシニング、ヘルデルの二氏起りて、新らたに批評の新領を開き、前者の客觀的、後者の主觀的の觀察を以て、長所を稱揚し、欠点を批難し、大に斯道の進

路を明にしたり。之に次て出でたる者、則ち芳名万国に赫々たるゴッテ、シルレルの二氏にして、ゴ氏の寫實派を以て立ち、シ氏の理想派を以て起り、一はエッセイ詠史に長し、一はオペラ戯曲に秀て、手足相援けて各椽大の筆を振ひ、茲に全く獨逸文學をして獨立せしめたり。是則ち獨逸文壇の六大家にして、其著作の優劣の暫く措き、諸氏の斯道に盡せし功勞に至ては、兄たり難く、弟たり難く、實に獨逸文壇三幅對の名ある所以なり。

抑も文學の其國の風俗人情と相伴ふものにして、東西各々其趣を異にす。近時泰西の文物我國に輸入し來りてより、其詩歌小説も亦盛に翻譯せられ、大に我國の文學に裨益を興

へたり。雖然其翻譯多くの英佛の二國より出しに過ぎずして、歐州文壇に於て尤も稱美さるゝ獨逸文學に至ては、昨今漸く其萌芽を出せしものなれば、如何ある人物が獨逸文壇に在るやも知る人尙稀あるが如し。蓋し書を讀んど欲せば先づ其著者の人物を明にするを要す。爾今我國に獨逸文學の行はれんとするに際し、余等不肖を顧みず、茲に獨逸六大家の傳を編み聊か斯學の便に供せんとす。然れども元より淺學不才、杜撰誤謬の点無さを保し難し、讀者乞ふ之を諒せよ焉。

明治癸巳三月下旬

編者誌

獨逸文壇 六大家傳目次

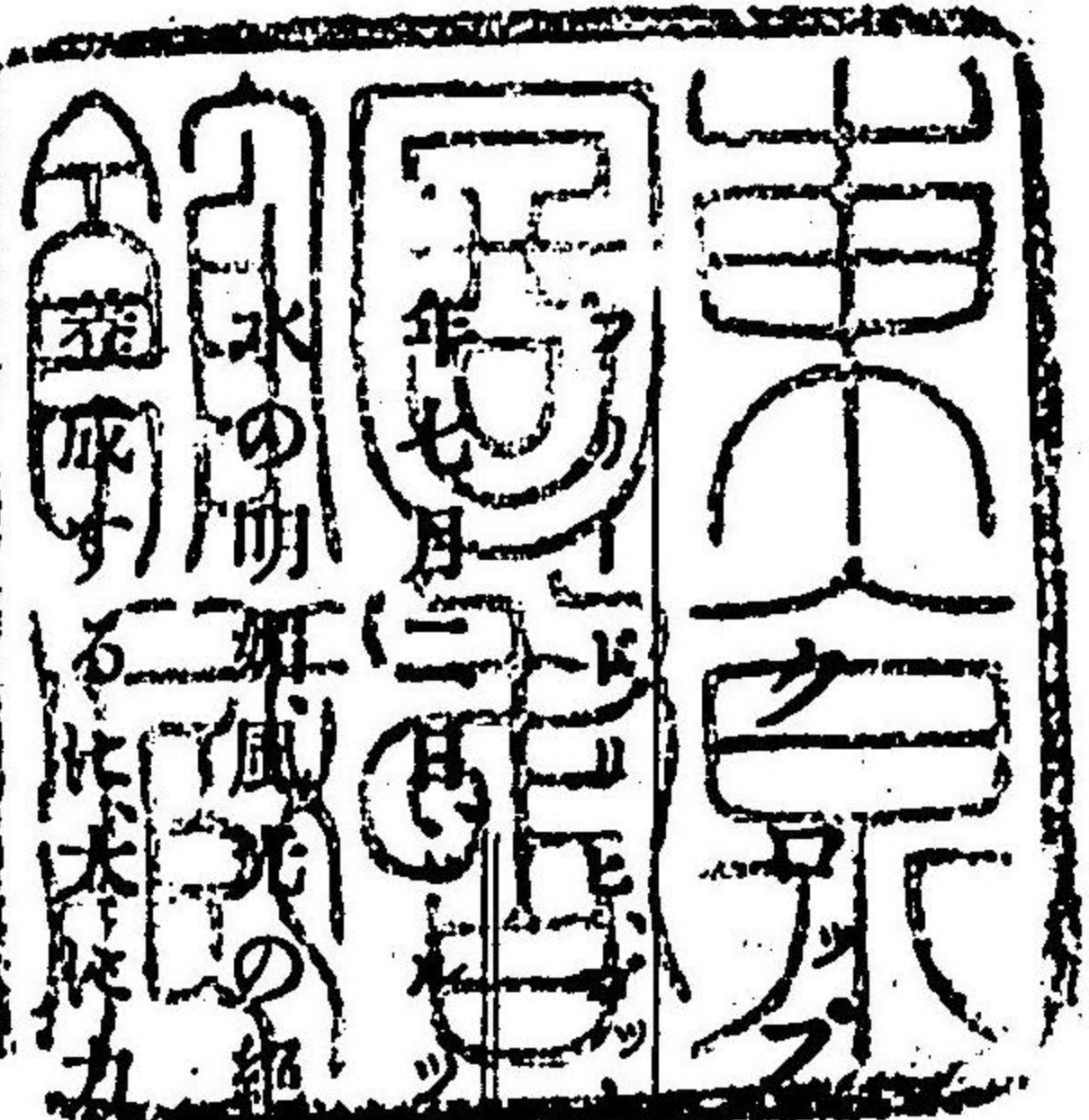
- 一 シロップストク傳……………一
- 一 ウォーランド傳……………三三
- 一 レンツ傳……………三六
- 一 ヘルデル傳……………七三
- 一 ゴッテ傳……………九六
- 一 シルレル傳……………一二六

獨逸 文壇 六大家傳

連山 霧山人



ストック傳 (Klopstock)



クリップ、クロープストック氏は千七百二十四年の七月三日、プロシヤのクエッドリッブルクに於て生る。此地山水の明媚、風光の絶佳ある、後來氏が詩人たるべきの資性を養成するに大に力ありしもの、如し。加ふるに兩親は氏を養育するに當て、極めて嚴肅なる宗教的教育を以てしたりしかば、氏の精神は益々活潑銳利に發達して、夙に高尚なる

クロープストック傳

氏の性質

宗教的の觀念に富めり。左れば其行爲の如きも頗る端正にして、輕薄の所業を忌むと蛇蝎よりも甚しく、彼の變遷極りなきウァーランド氏の生活に比すれば、全く正反對にして、始終一轍に出で、實に嚴正眞摯なる君子として一生を終れるが如し。故に其力を概ね歴史的宗教的の著作に用ひて、其文字の如きも更に華美流麗からず、從て輕薄鄙猥ある佛國文學に心醉せし、當時の人情には適せざりしと雖も、其意想の高尙幽雅ある、一度氏の著作を繙くに當ては、讀一讀妙味を加へ、秋宵の曉に徹するを覺えず。

氏の就學

千七百三十九年則ち氏が十歳の時、初めて家庭の教育を離れ、プルーターの中學校に入りて勉學するとなれり。此校に附屬する圖書館の、尤も古物古書の參考品に富めるものありしかば、氏の好で常に圖書館に在りて、古聖先哲の著書を繙き、銳利なる腦力を以て之を理解し、大に其智識を進めしが。就中氏の詩歌を嗜み、古來有名なる詩集の類を參涉翫味し、以て大に其詩想を開發したり。於是氏のソイセ以來傳習せし作詩法を研究し、又自ら詩を作らんとの念を起せり。其材料にハインリヒ、フアイケルの傳記を撰み、之を一大詠詩に作りて、其人の行爲を現し、又之に依て自己の詩名を輝さんと欲し、行くにも止るにも、常に思を其趣向組立に沈めて、寸時も之を忘ると、あかりき。併し乍ら此企圖の半途にして、氏が一生の大著作 Messias (キリストの爲に擯けられ、遂に

氏著作の端緒

意を果さずして止みぬ。

其の後氏の「ポッドメルの翻譯に因りて、ミルトンの失樂園を讀み、左らぬだに宗教に感染せる氏の精神をして益々感動せしめ、只一國一人の事蹟を綴らんよりの、天地萬有の主宰なる神の大能力を述べて、其宏徳を現いさんとの決心を以て、爰に宗教的詠史を作らんとの心願を起し、失樂園を模範に取りて、遂に彼の有名なる *Messias* の著あるに至れり。氏をして爰に至らしめたるもの、元より幼時教育の然らしむる處なりとの雖ども、亦ミルトンの著作大に力ありと云ふべし。左れば氏の「*ポルター*」を去るに當りて、其告別の演説中にミルトンを稱賛して「詩學の護神」ある尊號を與へたり。

千七百四十五年に至り、氏の神學を研究せんが爲に、エナ大學に來り、此處にて彼の *Messias* の第一篇を起艸せり。併し乍ら其句節を調ふると未だ意の如くあらざるか故に、先づ其旨趣を散文に綴り置けり。

氏初めて
文學社會
に入る

翌年氏の「*ライプチヒ*」に來れり。當時此處に詩人作家の一體ありて、*Braemer*、*Beitrage* (ブレーム) 人の援助ある雜誌を發刊し、大に文壇上に勢力を有せしが、氏も亦親戚シミットの紹介に因りて、此團體に加入するを得たり。其會員にハ經驗卓識に富める人甚からざりしかば、氏の誠意熱心を以て此等の人々と交を通じ、大に自己の見識を廣めしが、氏も亦大に人々の容るゝ處とありて、終に刎頸の友となりし人少

からず。後日氏が當時交際せし人々を詩歌に詠じて、之を稱賛せしを見ても、其交情の如何を知るに近らん。

爾來氏の三年間此處に在りて、此等の人々と相往來し、互に胸襟を開て、或は論し或は笑ひ、尤も愉快なる時日を送りしが、遂に此團體の解散に會し、各々其欲する處に向て去るに至り、氏も亦此町に住居するとの不愉快を感せしかば、去てランゲンザルツァーに至れり。然れども僅に此三年間の生活の、氏の爲に尤も利益ありし時代にして、氏の名も亦此時代に於て初めて世人に知られたり。則ち彼の *Messias* は、此處に於て彼めて *Bremer Beiträge* の紙上に現はれ、非常の好評を博したる者にて、其他の詩歌も此處に於て公にせられしもの

多し。且つ氏は此間に於て六脚ハクツツメ句法を規定し、之を己れの作歌に適用したり。元來此法は己に以前に於て、ゴットセッド好んで之を用ひ、又之を獨逸文學に適用せんと試みたりしが、遂に意を達する能はず。此時迄獨逸語を以て此法を用ふるものは有らざりしを、氏常に遺憾となし、苦慮熟考して、之を獨逸語に適用せんとを勉めたり。蓋し六脚句法を獨逸語に適用したるは、實に氏を以て其嚆矢となす。

千七百四十八年氏はランゲンザルツァーに來りて、家宅教師の職を務むるとぞあれり。此處に彼のシミッドの姉妹ソフィエ、シミッドなる少女ありて、氏は之と相知るを得たりしが、嬢の容貌の清艶にして、其起止の温雅ある、爰に氏をして愛戀の

ソフィエ
との關係

情緒を開かしめたり。然れども嬢の氏に對する愛情は、只單純の交際に過ぎずして、所謂片戀の有様なりき。之れ氏が有情の人とありし初にして、實に氏が二十五歳の時なりとす。後日 Am Fanny (愛したる者) と名付けて歌ひしは、則ち此嬢のとあり。

ホッ
トメ
ル
の
交
際

或日氏のゲルトチルより、ホッドメルなる者、氏の著作 Mes-sias を熱心に愛翫味するを聞き、直に ホッドメル に一片の書狀を送りて、已か則ち愛讀書の著者あることを告げ、且つ別戀の交際を結んことを乞へり。ホッドメル は此の書狀を受取りて喜悅措く能はず、如何にもして此愛すべき一少年の爲に、其進路を興へんと欲し、ハルレル を始め其他の朋友等に

も書狀を送りて、共に氏の爲に盡す所あらんとを請求し、其第一著として氏の著作を佛文に翻譯して、フリードリヒ、大王をして之を讀ましめんが爲に、先づ兎も角も ナヨリヒ に來らんとを求めたりしも、此時の則ち氏が ヘミッド嬢 を思ふの熱度、最高點に達したるの時にして、片時も嬢の傍を去るに忍びざりしかば、此親切ある ホッドメル の勧誘に従ふと能はず、尙 ランゲンザルツァー に戀をたりき。

氏
ナ
ヨ
リ
ヒ
に
至
る

其後氏も此戀の遂に達す可らざるを悟りけん、千七百五十年の夏 ナヨリヒ に來りて、愛顧者 ホッドメル の客とあり、親切ある待遇の下に在りて、心中些細の憂慮なく、全力を其の著作に盡して、大に文筆を鍊るを得たり。加之此寓居は、松杉鬱

ク
ロ
ッ
プ
ス
ト
ッ
ク
邸

々たるレーヘン邸に倚りて、樓閣高く聳へ、一目の下に市街を見下ろし、遙に眼を轉すれば、アルプス山脈連綿として起伏し、雲を突くユートリ山と紫緑を争ふものゝ如く、有名なナユリツヘル湖は碧色鏡に似て、山影倒に浮ふなど、其佳景言語に絶へたり。二十九年の後に於て、ゴッティ氏 Patriarchen (祖先等) 亦る詩を作りて、此風色を稱賛したるに由りても、其絶景を想像し得べきあり。斯りしかば氏は朝夕此天然の美術を目撃して、其詩想を發達せしめ、亦之に依りて材料を得たることも少からず。

ポッドメル
の不

斯く氏は愉快なる閑日月を此處に送りしが、暫くにしてポッドメルは、氏の不羈活潑なる行爲、大に其の著作 Messias の清

淨ある精神に反するを見て、稍々氏を忌諱するの色を現はすに至り。氏も亦此一小都府に生れ、他を見ずして學識に誇る、所謂井底の蛙に等しき執拗ある老詩人に對して常に不快を感じ、漸く此居を厭ふの念を生じ來たりしかば、兩人の交情自然と疎隔し、同じ家に在りと雖も、相見さると殆んど越月に及びたり。於是氏は遂に心を決し、ポッドメルの許を去りしが、ポッドメルは之を見て益忿激し、其友人等に送りし書中に氏を指して恩知らずと云ひ、且つ Messias の精神を引用して、大に氏の不徳を責めしかば、初め水魚も管ならざりし兩氏の交際も、爰に全く怨敵の如くありて、後友人等の中際に因りて、稍々相和らぐを得たりと雖も、氏は再び彼れの家

に寓居を求めざりき。

氏デンマ
ク國王
の宮殿に
入る

其後氏は八月間スウェットランドに在りしが、適々デンマ
ク國の宰相ベルンストルッフ伯、其主君フリードリヒ第二世
(千七百六十六年死す)の命を蒙り、彼のMessiasの後篇を作らんが爲
に、年四百「クレーレル」を給して招待するに會ひしかば、千七百五
十一年氏はコーペンハーゲンに至りて、フリードリヒ王の宮
殿に入れり。氏の此處に来るや、國王よりは非常に愛顧され、
常に謁見の榮を給はり、宰相より朋は友として待遇され、絶
えず來訪を恭ふし、實に名譽と愉快とを以て、其著作に全力
を抛つを得たりしか、氏は此處に於て出版せしMessiasの巻
首に於て、「デンマーク國王は、獨逸人あるMessiasの著者に、其

著作を完結せしむるに必要ある閑日を與へたり」と書して
謝恩の情を表せり。

初めてモ
ルレル嬢
と會す

氏のコーペンハーゲンに来るや、其途中ハムブルヒに於て
初めてメタ、モルレル嬢と相知るを得たり。之れ則ち氏が後
來の夫人とされるものにして、コーペンハーゲンに來りて
後、互に書狀を往復して、相思の情を遣れり。氏が「アドリ」
と名付けて嬢の事を歌ひし中に、マルガレタかハムブルヒ
のモルレル嬢か、と迄讚美したる程なりしが、爰に於て(千七
百五十四年)氏の則ち嬢と偕老の契を結び、初めてホームの
生活を味ふに至れり。然れども悲哉、落花止むるによしなく、
僅々四年の鴛鴦に過ぎずして、嬢の病痾の襲ふ處となり、遂

に不歸の鬼となりしかば、氏の悲嘆措く能はず、切めて之れが爲に一の紀念を残さんと欲し、嬢の遺書を出板し、且フアルトナの近傍オッテンゼンに在る夫人の墓碑に「神より蒔かれたる種の復活の爲に腐る」と題して、聊か愁思を慰めたりしが、尙十四年の後に於ても、氏が夫人を思ふの情の消滅せざりしもの、如く、*Messias*の第十五歌に於て、夫人を追懷せしの文意あるを認む。

千七百五十九年より千七百六十二年間の、或の郷里クエッドリンブルヒに歸り、或のブラウンシュワイヒに住し、或のハルベルスタットに在りしが、其後又コーペンハーゲンに至り千七百七十一年迄此處に止まれり。其間に於て尙當時迄綴

りつゝありし *Messias* と共に、亦戯曲の著も多くありて、殊に千七百六十八年に作りし *Die Hermanns Schlacht* (ヘルマンの戦争)の如き、ヨゼフ第二世に捧げて金剛石を鏤めたる金牌を得、大に名譽を博したるものあり、又之れに依りてヨゼフ帝よりザクセンに招かれたりしも、他に事情ありて、氏の其招きに應ずると能はずして止みぬ。

千七百七十一年クリスタファン第七世の寵臣ストルエンゼーの爲に、ベルンストルッフ宰相の位を退けらるゝに當り、氏のデンマーク王國の公使館參事官の資格を以て、ハムブルヒに派遣され、此處に住居することとなりしが、千七百七十六年フリードリヒ、バーデン伯の招きに應じ、カルスルーヘー

氏の再婚

に至りしも、僅に一年間の滞在に過ぎずして、又ハムブルヒに歸り、死に至る迄此處に止まれり。千七百九十一年氏は六十八の高齡に於て、永年の女友ありしヨハン、フオン、ウァンテムと再び結婚したり。嬢は氏の亡夫人メタターの姪にして、實に親切なる愛情を以て、氏の晩年を慰めたり。

氏の死

千八百〇三年三月十四日、氏は七十九歳の高齡に達してハムブルヒに終り、同月二十二日麗明たる春日の早天、華美盛大なる葬式の下に、オッテンセンに在る先夫人メタターの墓邊に埋葬せられたり。それ氏の生活は爰に終ると雖も、其芳名は今日に至る迄——否今後幾年を経ると雖も、尙人口に膾炙して、蓋し消滅するとおけん。

氏の著作

今爰に氏の傳記を完結するに當り、聊か其著作に付て述べ、以て氏が性行を見るの資に供せんとす。氏の著作中尤も有名なるものは、前來屢々述へ來れる *Messias* であるが、之れ則ち

氏の案出せる六脚句法を有する、二十篇の宗教的詠史にして、千七百四十八年に起艸し、漸く千七百七十三年に完備し、其間實に二十五年の長日月を要したるものあれば、氏自身も亦存生中に於て、之を完結し得るや否やを危ふみし程にて、嘗て *Der Erlöser* (救主) なる詩を作りて、「此の著を終る迄は余に生命を貸せよ」と祈禱せしこと、どもありしが、幸にして其全篇を見るを得しは、實に氏に満足を與へたるのみならず、又獨逸文學界の洪福と云ふべし。氏は此著作に於て、人間

の脳髓を以て想像し得らるゝ、尤も高尚なる事柄を書き現はさんと欲し、其材料として半神半人なる *Messias* 則ちクリストを撰びて、大に宗教上の事實を述べ、其眞理を發揮したり。而して其趣旨ハ、則ち著者が第一章に於て墮落せるアマムの後裔をして、再び神の慈愛に來らしめんが爲に、メッシアスは此の世に下りて惱まされ苦しめられしが、再び天に昇せられたりと云へる如く、全く神と人間との關係にして、或は場處を天に假り、或は人物を悪魔として、其意味の解し難き、實に一種の哲學書と云ふも不可あかるべし。惟第一篇は天上乃ち天父とクリストの評議場にして、天父は人間の罪を定めんと云ひ、クリストは之れを免さんと諫むるの處、第

二篇は地獄の場にて、悪魔等メッシアスに謀反せんとするを、アップアトナー(以前は神使にて罪を犯し悪魔となりし者)之に反對するの處、第三篇は現世の有様にして、基督信者がオニル山に於て、謀反者ユダに會するの處、第四篇は學者長老等クリストを死罪に陥れんと評議するの處、及び晚餐式會、第五篇はゲッセマチの煩悶、第六七篇はユダの謀反及びピラトの裁判、第八九十篇はゴルゴタに於ける十字架の死、第十三篇より復活の事蹟、第十九二十篇に至り、クリストの昇天を以て其局を結べるものあり。斯く企圖の大あるが故に、之を文學上より評すれば、元より多少の欠点もあるべしと雖も、兎に角事蹟を靈界に假り、全く哲理の想像に因りて、斯

る大篇を綴りしは、氏も亦凡人に非らざるあり。

其他氏の詩歌多くある中、今爰に種類を區別して、二三の表

題を記さんに、**宗教的のもの**に、Den Erlöser (教主) An Go-

愛情的詩に、Frühlingsfeier (春の祭) **愛情的のもの**に、An Fanny

(愛したる者に) An Cidli (マドリー) Künftige Geliebte (未來の

愛情的詩に、Das Rosenband (薔薇の花輪) **友情的のもの**に、Die

Frueheren Graeber (前に葬られたるもの) Zurichsee (ヤン

愛國的詩に、**湖愛國的のもの**に、Unsere Sprache (吾人の言語)

Die deutsche Biebel (獨逸の聖書) Vaterlandlied (本國の歌)等あり。

其外教會の爲に作りし讚美歌も亦少からず、戯曲に於ける

氏の材料は、一部は聖書より、一部は古詩より出てたるも

は文

の、如し、則ち Der Tot Adams (アダムの死) David (人名) Her-

manns Schlacht (ヘルマンの戦)等總て宗教的、歴史的のものあり。

氏は亦散文の著作にも富めるものあるが、殊に *Gelehrtenre-*

publik (學者の共和政)と名付けたる著作に於て、ツルイデン

國の言語並に文學上の觀察とて述べたる中に、大に獨逸語

の事を論じて、當時多數の學者が、之に對して抱ける考へを

攻撃したり、又氏の常に獨逸國の言語に意を注ぎ、古語を改

良し、新語を創始して、之れを其著作に用ひ、獨逸文學に向て

大に言語の自由を興へたり、其功勞蓋し僅少にあらざるべ

し。

ウーランド傳 (Wieland)

ウーランド氏は千七百三十三年九月二十五日、シユウリーベン國の小都セペラハ町の近傍ある、オーベルホルツハイム村に生る。父は基督新教の傳道師あり。幼時家庭に在りて、夙に嚴格なる教育を受けしに、氏も亦天資敏捷あるを以て、智識の發達頗る速く、十三歳にして已にウエルギル及びボラツ等の著書を読み、獨逸語のみならず、羅句語を以て詩を作るとさへ出來たり。氏が家は純然たる宗教的の家族なるが故に、氏も亦幼時より熱心なる基督信者なりしが、十四才の時マクデブルヒ村の寺院に入り、學に従

宗教熱心
時代

氏の幼時

事するに至りて、益々其信仰を高めたり。此際氏の好んで讀みしものの、彼の有名なるシロップストックがメッシアスあり。然るに年を追ふて、氏が智力の尙進歩するに従ひ、宗教上の疑問交も起り、心常に平ならざりき。其後父家に歸りしが、ツフイエ、グーテルマンなる女友を得、茲に初めて幼稚なる愛情の萌芽を現はしたり。此嬢と交際の間、氏の精神は漸く宗教的の觀念を去て、社會的の娛樂の方に進みつゝありしが如し。蓋しソフイエ嬢は、ウーランド氏より長ずると二年、他日マキシミリヤン、フォン、ラ、ロツハ氏に嫁し、ソフイエ、ンオン、ロツへとて隨分知られたる女作者となりし人なり。

千七百五十年則ち氏が十七歳の時、ナウゼンゲン大學に入り

法學を修めしが、元より法學の好む處にあらざれば、常に眼を哲學史學等の書籍に注ぎ、又クロップストク、ポッドメル等を模範として、大に詩情を養成したり。

因云、ポッドメル氏の千六百九十八年瑞西國ナウリヒ府に生れ、千七百廿年、其友フライチンゲル氏と共に、ナウリヒ文學會(或は瑞西派)を起したる人あり。

千七百五十二年の秋、氏はナウリヒ府あるポッドメル氏が客となり、同氏が教示の下に、只管詩學を研究し、其の交る所の者も平生出入するポッドメル氏が親友等に過ぎず、殆んど隱遁の有様なりしが、遂には同家の骨肉のものと、人より怪まらるゝ迄にあり。此際 *Empfindungen eines Christen* (基督信者の

ポットメル
の家
に
客
たり

感歎) *Hymnus auf Gott* (神への讚美歌) *Briefe von Verstorbenen an hinterlassene Freunde* (朋友への遺書) 及び *Der gepruete Abraham* (試みられたるアブラハム等の著ありき)。

斯くてポッドメルの許に客たること二年、同府の役人グレーベル氏方、家庭教師を依頼されしを以て、ポッドメルの家を辭せしが、其後千七百五十九年に至り、又候家庭教師として、ヘルコ府のインテルが家に招かれたり。此の時氏は暫らくユリエ、ボンテリある女友を得しが、此情交も時を経て消滅せり。此を宗教熱心の時代とす。

此後氏が從來の宗教的觀念は全く消滅し去りて、方さに其反對なる方向に轉じ、過去の罪障、未來の賞罰等は一切慮は

任意主義
時代

す。只自己の情慾に任せて事を處したり。委しくは後段性質論に於て論せん。左れば此時氏の好む處は、華美ある彼の英佛の文學に在て、常にシエフツベリー(英)ルソー(佛)ウォルテール(全)チテロット(全)及びアレムベルト(全)等を慕ひ、其著書を愛讀せり。

千七百六十年ビベラッハ府の書記官に任せられしより、スタヂオン伯と交際して、上流社會の華奢放逸なる境界に交はり、其品行も次第に遊惰に流れんとするの勢ありし。此時氏は「ナナチ」及其他の著ありしが、世に公にするや、忽ち多數の反對者を惹起せり。就中「ハインブンド」黨の輩は、ウッランド氏を嫌惡すると甚しく、ショップストック氏の誕生日に際し、ウッ

ランド氏の著を火中に投じて、悉く灰燼にせしと云ふ。

氏は殊に時代物を綴ることを勉めしが、之が爲めに師とあせしも、矢張英佛の詩人にして、彼の滑稽諧謔を以て稱せられたる「フイールナング」(英)「ステルチ」(全)「スフット」(全)等は最も好む處ありし。

スタヂオン伯死せし後、氏は「マインツ」の撰擧侯「エンメリヒ、ヨゼフ」の招きに應じ、エルフルート大學の哲學科の教授とあれり。實に千七百六十九年、氏が三十六才の時なりし。以上を任意主義の時代とす。

此時代の著書は、Don Sylvius von Rosalva (主人公の名) Agathon (全) Musarin (全) Idoris 及びミセスヒーヤの翻譯等あり。

老成著實時代

扱て第三期を老成著實時代とす、則ち彼是一方にのみ偏せし第一第二時代の中庸を得たる時代にて、年齒まささしに不惑に近づきしかば、從來の血氣も冷却して、其言行次第に眞摯に趣きしに依る。

ワイマールの宮殿に入る

千七百七十二年、氏はザクセン、ワイマール州の女侯アマリヤの招く處とあり、二侯子コンスタンタン及びカル、アウグストの師として、同國の宮殿に入りしが、後千七百十五年カル、アウグスト位に即くに及び、更に顧問官として尙優待を受けたり。此間或は心の儘に書を読み詩を賦するを得頗る愉快ある生活を爲したり。氏がゴッテ、ヘルデル、シルレル氏等と交際を結ひたるは、恰も此際なりしあり。

氏のワイマール府に來るや、間もなく「獨逸メルキユル」神名智恵の神あり、又「ヂュピテル」の使者と稱すと題する雜誌を發行したりしが、彼の有名なる「オベロン」の如きも、初め此紙上に現はれ、大に喝采を博したるものなり。千八百〇年「アリスナッソ」を著せしが、是遂に名殘の作とされり。總て此時代の著書を見るに、前時代の物に比して、自ら面目を異にせり、隨て氏が思想の高雅老實に進みしを知るに足らんか。

氏の死

千八百十三年一月二十日、八十才の高齡に達して死す、之をオスマンステットに葬る、夫の墓亦傍に在り。

ウッランド氏の、其哲學上の主義に至りては、随分不完全あり

しにも係ならず、獨逸文學界に與へたりし裨益又甚しとせす。

西國の功勞

則ち氏のシロップストッフ風の高尙嚴格にして、稍解し難き文字を拆け、却て專ばら簡易流麗を主とせしを以て、從來佛國文學を喜びたる上流社會の嗜好をして、更に獨逸文學の方に轉せしめたり。蓋し氏が著書の輕快愛すべき、肯て佛國文學に譲らざるを以てあり。是其第一と云す。

氏の其作詩の隨分巧みからざるにも係ならず、シロップストッフ氏に依て擯斥されたる韻脚法を恢復して力あり。是其第二と云す。

氏の滑稽諷刺諧謔等を熾んにしたり。是其第三と云す。

氏の獨逸文學中に時代物の新領を開きたり。是其第四と云す。

以上四ヶ條の功勞ありし程のウーランド氏あれば、氏の風を慕ひ之に摸倣せんとする者亦甚からず。就中ムツイス、フオン、チユムメル、ハインゼ、ヘルメス、ソフイエ、フオン、ラ、ロッヘ等其鏘々たる者なり。

氏の著書

ウーランド氏の著書の概ね時代物にして、戯曲、歴史、歌謡の如き、其長所にあらず。而して其過半は、古人の摸倣にあらずんば、古書を敷衍したるもの、如く、華美ある佛國文學を崇拜せしより、往々鄙猥に流るゝの傾向ありと雖も、之を以て氏が平生の品行を推すべからず。氏の其著書を、自家の見女

等に決して讀ましめざりしと云ふ。氏が著書の第二病と云ふの、稍々冗長に失する是なり。

レッシング氏の評すらく、ウァーランドが第一期の著書の、其皮相の宗教的にして、其精神の決して上帝の語を容れしものにあらず。彼の「基督信者の感覺」の如きも、其基督信者の眞正なる基督信者にあらず、其感覺も眞摯なる感覺にあらざるなりと。ゴッティ氏も亦評して曰く、彼か女神は、道德界を人生の樂土と認めたるも、其後智識の果實を喰ひ初めしより、遂に人間界に墮落したりと、共に味あるの語と云ふへし。

第二期に於て氏が著しき勳功とも云ふべきは、乃ち「シユクスヒーヤ」の翻譯となす。蓋し「シユクスヒーヤ」は「ウァーランド」に依て

初めて獨逸語に譯されしものあれば、今代に至ては左まで價値のあらざるも、當時の文學界に、實に藪からざる裨益を與へたり。

氏が當時名聲を博したる一の媒介とありしは、之に次て著したる「アガント物語」なり。

第三期に至りては、彼の有名ある「オペロン」の著あり。氏の此書を著すに當て、材料を古き佛蘭西の時代物より採り、又「シユクスヒーヤ」が「夏夜の夢」をも、用ひて是が模範とせり。蓋し此「オペロン」の氏が一代の傑作にして、ゴッティ氏も口を極めて稱賛し、月桂樹を贈りて以て嘆服の意を表せりと云ふ。

氏が一代の著書、此他枚舉に遑わらざれども、冗長を厭ふて茲に列記せず、只其一汎を論ずると然り。

氏の経歴

ウーランド氏は、其経歴に於て三回に變遷ありし如く、其氣風に於ても亦三回の變化ありしもの、如し、乃ち第一期に在りてハ、氏は一旦宗教に熱心すると甚しく、殆んど厭世的に傾きしも、其熱度次第に薄らき、信仰も稍々皮相的にありつゝも、第二期に至つて遂に之れが正反對に轉じ、専ら放逸遊蕩を事とせり。蓋し氏は宗教家の家に生れ、幼時より徹頭徹尾宗教的教育を受けしが故に、先づ非常に宗教を信せり、されども是只先入の假に主と成りしに過ぎず、元來宗教的の人物にあらざれば、漸く世情に通ずると共に、遂に第二

期の如き反動を來たせしなり。而して此反動や、畢竟一時の血氣より起りしものなれば、其年齢長じて、血氣定まると共に喝然として大悟し、遂に極めて洒落温雅ある君子とはありしあり。

要するにウーランド氏は、學者的の詩人にあらず、才子的の詩人にあらず、極めて愉快ある、極めて胆大なる詩人にして、褒貶共に意に介せず、常に春日の蕩々たるが如く、温容以て人に接し、嘗て怒を面に顯はせしときし、氏ハまた辨舌爽かにして而かも巧なれば、之と語るもの殆んど秋夜の長きを覺えずと云ふ。一言以て之を評すれば、ウーランド氏は面白き人物あり、通人なり、粹樸あり、詩人としてハ勿論、ゴッテール氏

に及ばざるも、人物として、寧ろ彼に優れる處なり。試みに日本文學史に是か比を求めん乎。種彦も當らず、馬琴も不可あり、只京傳と西鶴と稍々之に肖たりと思ふ。

レッシング 傳 (Lessing)

ゴットホルド、エフライム、レッシング氏は、千七百二十九年一月二十二日、オーベルラウツの一小市カメンツに於て生る。父ハヨハン、ゴットフリード、レッシングとて、博學宏才有徳の君子にして、基督教會の牧師を職とせり。氏は其十男中の長子にして、外に二人の姉妹を有し、一人は姉にして氏より長ずると三歳、他の妹なり。

幼の幼時

両親の親切にして注意周到ある教育は、氏の才智に迅速の進歩を興へたる耳ならず、天性亦學を好み、心なき幼時の戯品すら書籍を最上とし、嘗て其父書工をして氏の肖像を畫かしむる時に當り、書籍の累積と共に畫かれんことを乞ふて止まざりしと云ふ。然は黃嘴にして他鳥を凌ぐ、氏が將來獨國文壇に雄飛するに至りしもの、蓋し偶然にあらざるなり。

氏の就學

千七百四十一年、マイセンの「サントアフラ」校に入校するに當りてや、此校入學の年齢ハ、十四才の規定ありしにも係らず、氏の定齡に先立つと一年、則ち十三歳にして入校することを得たり。加之間も無く大に頭角を現はし、校長ハ氏を指

して二重の食物を要する馬なり」と評するに至れり。以て氏か學才の衆生に抽んでたる知るべきなり。氏の此校に在るや、全く課業外に獨立の學科を踏みて、羅馬希臘の古書を讀み、又好んで古代數學の歴史を學び、殊に羅馬のプラウツス及びテレンツの著書に依りて、戯曲の組織を研究せり。斯く古代文學に熱注せるのみならず、亦ハッゲドロン、グライム、バルレル等の著作を繙き、近時の文學にも目を曝せり。左れば氏の學才は非常に進歩し、稍々想像力にも富むに至れり。於是か氏の曾に之を讀むのみを以て満足せず、己れ自ら之を作らんとすの希望は、既に此時より胸中に盈々として止まず。遂に彼の *Jungen Gelehrten* (若學者) と見るに至れり。之れ實に

氏の第一

氏が第一著の著作にして、此學校時代に於て其材料を集めたるものあり。又彼の *Ueber die Vielheit der Welten* (世界の多きことに就て) と題せる誨詩の如き、全くバルレルの著作を讀みて誘導されたるものありしが、其完結を見る能はざりしは、實に惜むべきことあり。

氏大學に入

斯く理解力の非凡ありしよりして、氏の間も無く此校を卒業し、千七百四十六年、則ち十七才の少年として、ライプナヒ大學の學生とされり。兩親の氏をして神學を學べしめんとすの希望ありしと雖も、氏は之を學ぶを欲せず、神學に稍々縁遠き博言學を研究し、只精神一意文學、殊に戯曲に熱注せり。蓋し氏が性質の然らしむる處ありと雖も、當時大

レッシングは

學教授たりし數學者、哲學者、ケストナルの薰陶と、同教授の下に一團體を作れる青年才子との交際、氏をして益々神學より遠さからしめたるもの、如く、且當時のライプナヒ市の風俗状態も、亦氏の精神に非常の感化力を有せりと云ふ可し。嘗て氏が其母に送れる書中に「ライプナヒに於て、他の一小世界を見得るあり」と云へる如く、當時ライプナヒ市の繁華の、全獨逸國に魁して、實に氏一人の眼に斯く見えし耳ならず、亦一般世人の認むる處ありしかば、氏をして神學を學ぶを迂遠と感せしめたる、亦是非無き次第あり。併し乍ら氏の其學課の勉強して怠る處なく、常に上席を占め居たるの、之れ氏か才能の致す處ありとの雖も、氏自らも

亦他學に走せて、主學を忽にするとの批難を受けまじと勉めたるもの、如し。斯く其精神を學事に專一にするると共に、亦体育に注意して、擊劍、踏舞、馬術等の遊技を試み、傍ら身体の發達を謀れり。未だ壯に滿たざるの一少年にして、其注意の周到なる、實に感すべきあり。

演習熱心
時代

他に氏が尤も愉快とする處のもの、觀劇にして、當時フリドリッゲ、ノイベルの一座にて行興せしが、氏の常に之に臨みて殆んど餘せしと云く、氏自ら云へる如く「余にして觀劇を止めるの、寧ろ乾燥無味あるパンを食するの安きに加かず」と、以て其好嗜の度を知るべし。左れば氏の親友ワイセルと相計りて、ノイベル婦人の爲めに、佛國戯曲「ハンニバル」等

の二三を翻譯して、該劇場の自由入場券を得んと試るや、常に斯道に心を傾けたりしが、後友人ミリュスの斡旋に因り、自由入場券を得て益々便利を得、又親しく、ノイベル夫人に就き、演劇に必要なる形容態度等、千差万別の振りを研究して、大に其濫輿を極めたり。氏の天性斯道を好み、已に十三四歳の頃より之に意を注きたれば、此處に至るも亦無理あらずと雖も、當時ノイベル夫人との交際の、氏が精神上に少あからざる感化を及はせしもの、如く、氏が嘗つて夫人を評したる語に、「男子の性質を有して、演劇に充分の智能を有する婦人あり」と、亦以て氏が夫人に對するの感情を見るを得べし。

氏の *Jungen Gelehrten* (若學者) を作るや、全く舞臺に適當せしめんと注意したるものありしが、此處に於て、ノイベル一座之を演したりしに、非常の喝采を博し、之を初陣として面白き脚本續々氏の手になり、稍々名聲を現はすに至れり。之れ氏が戯曲に熱注せる時代にして、氏の精神の一意之に集まりて又他事あきもの、如く、嘗に作者たるを以て満足せず、進んで舞臺に登り、自ら之を演せんと迄思ひ込めり。

然るに氏の舉動稍々両親の耳に達するや、温厚徳實ある親父の大に之を憂ひ、殊に當時才子の聞え高く、万事万人に抽んで、尤も歌曲に巧あるクリストローフ、ミリュスと親密の交際を爲すと聞き、憂慮措く能はず、遂に千七百四十七年自

家に呼び戻せり。左れば氏の兩親の嚴命拒むに由なく、郷里
 カメンツに歸りて其年の「オステルン」祭迄止まれり。其間慈
 父の常に氏の舉動に注意せしに、其品行端正にして疑ふへ
 き處なきのみならず、文學の才智非常に發達せしを認め、氏
 も亦「ミリュス」が人どかりを辨解し、決して人を惑溺せしむ
 るが如き人物にあらざることを証明せしかば、最初の疑念も
 爰に氷解し、再び許されて「ライプナヒ」に遊學するとどかり
 しが、兩親も到底氏をして神學を修了せしむるに能はざる
 を察知し、左ればとて單に文學のみに依りて立つの將來に
 於て稍々不安心の感ありしかば、此度は醫學を旨とし、傍ら
 博言學の研究を目的とせり。

再びライ
 プナヒに
 歸る

匹夫の志も之を奪ふ能はず、况んや才智拔群にして、其精神
 の幼より文學に向て走せたる「レッシング」氏に於てをや。醫學
 も遂に氏の志を牽留する能はず、再び「ライプナヒ」に歸るや、
 又熱心文學に従事し、且つ「ノイベル」一座が「ウヰーン」に赴く
 迄、以前の如く其間に交際して、演劇の稽古に其力を用ひ
 たり。併し乍ら氏も亦「ライプナヒ」を去らざる可らざるの不
 幸を招くに至れり。其以前氏の或二三俳優の爲めに保証人
 となりしが、爰に至りて其保証人たるの義務を盡さざる可
 らざるの場合となりしも、氏の資力之を辨する能はず、債權
 者より日夜督促さるゝの煩苦に堪へず、遂に「ライプナヒ」を
 遁れて、「ウヰッテンベルヒ」に來り、此處にて隨意に勉學せんと

氏ウヰッ
 テンベル
 ヒに走る

レッシング

せしが、到着後間もなく病痾の襲ふ處となり、左なきだに孤客の身の物憂きに、空しく病床に呻吟して、百感交々胸中に往來し、前後を追想して、稍々過去の生活の過りしを悔ひ、遂に其母に書き贈りし如く、已れの生涯に、殆んど堪ゆべからざる責任あると感して、大に奮起する處ありたり。

其後氏の病氣も漸々快復し、稍々安堵の思ひを爲すや、彼の債權者ライプナヒ人の用捨なく氏を追跡し來り、其返濟を請求して止まざれば、氏の此處にも居堪らず、再び決心して爰に全く大學の課業を捨て、ベルリンに赴き、當時「レドントイル、デル、リュツィゲルシェン」後「フォツセン」と改稱す、新聞の記者として、相應ある名聲を得つゝ、ありし友人「ミリュヌ」に投

して衣食の道を求むると共に、亦「ライプナヒ」人等の債務辨濟の資を得んと欲したり。

第二回
ベルリン行

之れ則ち氏が獨立の事業に就くの端緒にして、余義なく茲に至りたるものありと雖も、此不幸可憐の境遇に、反て氏に自立の精神を吹込みたる、隱然の一勢力あるが如し。左れば其「ベルリン」に來るや、身に一錢の餘財一領の美服なく、襤衣破靴乞兒も及ばざる不憫の狀態よて、千七百四十八年十二月漸く「ベルリン」に辿り着けり。此處に氏の「ミリュヌ」の外知人なく、語るも食するも「ミリュヌ」と共にするのみにして、人家櫛比往來人を以て織るが如きの市街も、氏に取りて、寂寥たる砂漠に異ならず、殆んど「ミリュヌ」の外一人の人間也。

き感ありき。其後書狀を往復すると數度にして、漸く郷家より僅少の金を得、一領の新衣を調えたりしが、其禮狀として兩親に送りし書中に曰く「自今余をして再び人に見せしむるを得べく、余を用ひんと欲する人々にも接近し、共に談話するを得べし」と、以て當時の狀態を知るべきあり。氏の性質として、已れの正良と信したる事、飽くまで男らしく之を貫徹せざれば止まざるにも係ならず、兩親に對しては實に小供らしく、其書狀の如きも一言一句愛情に因りて認めしを見る。

於是氏のメリユスの周旋にて、リユヂンゲルの書庫を整理するところあり、聊か衣食の資を得るに至り、其境遇稍々平坦に赴きしかば、メリユスと共に *Beitraege zur Historie und Aufnahme des Theaters* (演劇の歴史及び由來に就ての援助) と稱する、年四回出版の雜誌を發兌せしが、此のメリユスと説合のす、間も亦く廢刊せしと雖も、千七百五十一年に至り、ベルリンの特色を現せる政治及び文學に關する「*フックスン*」新聞の文學部を委任され、其附録として *Das Neueste aus Dem Reiches des Wizes* (智識界の尤も斬新なるもの) と題する、通俗文學新聞を發兌するを得て、茲に稍々其驥足を伸ばすの時機に會し、已に此時に於て氏が天稟の批評的精神は紙上に榮爛たりしか、恰も好し偶々ライプナヒとナユリヒとの間に文學上の爭端(ポッドメルがミルトンの失樂園を稱揚したりし

氏初めて
文壇に現
はす

を、ゴットセツト之を批難せしに原因せるものありを構成せしかバ、氏の大膽無比の精神を以て、獨特の健筆を奮ひ、憚る處なくライプナヒのゴットセツトに對して銳鋒を向けたりしに、其論正確、其指摘適切にして漏す處無りし、是に於てか世人をして稍々此若批評家を恐るゝの念を生せしめ、其名江湖の耳目に觸るゝと共に、數多の論文雜記を綴りて、續々之を出版し、且つ當時尤も數多の寄書家を有する、佛國の「フリッファ」リテート新聞に向つても、亦銳き筆端を向け、殊にルイソツが美術及び文學の世俗に害ありとの説を駁せしかバ、氏の名聲益々世上に嘈々たり。

再びウツテンベ

併し乍ら氏の思へらく、嘗に今日迄に學び得し所の學識に

ルヒに至

依りて、此事業に當らんとするの、恰も一葉に托して大洋を航するが如く、今幸にして名聲稍々擧るも、之れ只好機に投したる所以にして、遠からず沈溺の不幸に遭遇し、復起つ能はざるに至るべし。左れば茲に論據の鉄壁を築かんが爲め、暫時ウツテンベルヒに至り、文學の濫輿を究むると共に、亦學位をも得んと決心し、千七百五十一年の終りに當りて、ウツテンベルヒに來り、文學を研究すると共に、亦スパコヤ語を學びしが、氏の舍弟ヨハン、ゴットフリードも亦當時此處に在りて勉學せり。氏の以前ライプナヒを去るに當り、此處に滞在して専ら修學せんとの望みを起せしも、遂に果たす能はざりしに、今又非常の希望を抱いて此處に來れるもの、蓋

し偶然に非らざるものゝ如し。抑も此ウヰッテンベルヒの彼の有名なる獨逸文學の泰斗、宗教家マルナン、ルーテルが千五百〇八年より神學教授として大學の椅子を占め、千五百十七年十月三十一日、彼の有名なる九十五條の論文を城門に掲げて、宗教改革の端緒を開きしも亦此處あり。左れば氏がルーテルを欽慕せるや否やの暫く措き、此土地獨國文壇の二勇將に少あからざる關係を有する、亦奇と謂つべし。氏がウヰッテンベルヒの滞在の僅に一年間に過ぎざりしと雖も、氏が將來學者的の行爲、批評家たるの精神は、蓋し此處に於て全く完備したるものにして、希望の如くマキステルの學位を得、千七百五十二年再びヘルリンに歸れり。

第二回ベルリン行

再びヘルリンに歸り來るや、以前の如く「フオッセ」新聞に従事し、直に *Gelehrten Artikel* を著作して之を其紙上に掲げ、益々健筆を揮ふと共に、又傍ら英吉利、伊太利等の書物を讀み、其多數を翻譯して莫大の報酬を得、之れを以て氏の舍第等が教育の資に充てたり。加之氏が近時の文學上に於ける盛ある名聲は、稍々兩親との不和を柔くるの媒介とあり、氏が今迄に出版せし全篇を集めたる、四卷の書籍を贈りし時の如き、親父は云ふ可らざるの満足を以て之を受納したりしかば、茲に再び一家塗固の交情を恢復するを得たり。初め氏の爲には「ミリュヌ」の外人間さかりしヘルリンに於ても、當時は已に數多の知人を得、殊に「メンデルスゾーン」

コライ、ラムレル等諸名士と親密なる交際を結しが、一利害、今や反て其交際の繁雜にして、充分著作事業に従事すると能はざるに至りしかば、千七百五十三年の初めに當りてポツダムに至り、公園地の閑靜ある一家に住し、滞在すると八週間にして、永年思考しつゝ、ありし戯曲を綴作せり。之れ則ち「ミッス、ザラ、サムプソン」と題せる世話的(Buergertliche)悲哀戯曲にして、直に、フランクフルト、アン、デル、オーデルの劇場に於て興行せしに、非常の喝采を博したりき。

此一戯曲の結果は氏をして、嘗つて蛇蝎の如く排斥したる演劇者の中に、再び加はらんと希望を起さしむるに至り、且つ當時フリードリヒ大帝、非常に佛國的演劇を愛する處

再び演劇
に熱注す

よりして、自然獨國的演劇の隆盛を忌み、之を其首都より退けんとするの言行ありしかば、氏は大に憤懣し、己れ自ら其衝に當りて、之に抵抗せんとの慷慨心より、旁々茲に至らしめたるもの、如し。左れば千七百五十五年、氏は其朋友等に一言の告別も無く、ベルリンを去りライプナヒに至りて、以前の朋友ある演劇者にして、今は己に一箇の劇場を有するコッホに投し、日々斯道の稽古に身を委ねて余念なく、此處にて亦「ザラ、サムプソン」を演せしめ、且つ「ゴルドゥス」ある戯曲を綴り、之れをも舞臺に登せんとせり。

併し乍ら、之れを演ずる以前に於て、ライプナヒの富饒ある紳士ウカンクレルより、三年間の見込を以て、全歐洲大旅行の

氏歐洲大
行の案内
者となる

レッシング條

案内者に雇はれたりしかば、喜んで其招きに應じ、旅装万端整ひて後、両氏は先づホルランドに向つて出發せり。當時ラ
イプナヒよりアムステルダムへの旅行日程は、少くとも八
 十日を要せしが、氏等は此長日程を経てアムステルダムに
 着し、これより同盟州の有名なる都府を遍歴して、將に英國
 に向つて航せんとするに當り、偶々彼の有名なる七年間戰
 争破裂し、ウァンクレルはフリードリヒ大帝より至急歸國を
 命せられ、前途の旅行を停止せざる可らざるに至り、遂にラ
イプナヒに引返せり。左れば此旅行は再び繼續されざりし
 と雖も、氏は訴訟を提起して、旅行中止の損害賠償を請求せ
 しに、普澳戦争の止みし後、漸く其目的を達するを得たり。

クワイ
ト氏の
交際

於是が氏は再び文學に依りて、糊口の道を求めざる可らざるの境遇とありしかば、寸時も筆を措かず、畢生の力を盡して翻譯に従事し、以て衣食の資に充てたり。併し乍ら此處に來りてより、舊友ワイゼをはじめブラウエ等と互に往來し、樂しき日月を經過し、殊に有名なる Fuchling (春) の作歌者 エワルド・フォン・シュライスト との交際は、尤も氏に利益を興へたり。然るに間もかく ブラウエ は不歸の客とあり、シュライスト は普澳戦争に出軍し、ワイゼ は パリ に向つて旅行せしかば、頓に寂漠たる生活とあり、無聊措く能はず、且つ氏は此大戦争に當りて、普國に向つて同情を抱ける一人ありしかば、自然ザンセンの首府 ライプナヒ に止まるとの不愉快とあり、

千七百五十八年五月又ベルリンに歸れり。

第三回
ベルリン行

ベルリンに來りて、其舊友知人より非常の款待を受け、此所に稍々愉快の境遇とあるに至り、氏はグライムの作りし戦争歌に序言を書し、之を出版して、プロシヤ軍の兵士に配布せしに、其を讀て感激するもの少からず、爲に普國軍隊に一層愛國心の發揚を來したりと云ふ。

偶々クリストが戦死の飛報ベルリンに達せしに、氏は之を聞くや悲嘆措く能はず、余の悲哀中尤も激烈なる悲哀ありと書して、其死を惜むの意をグライムに示せり、グライムは氏が嘗てライプイヒに在りし時、軍隊を率ひてライプイヒに至り、偶然相會して意氣投合し、忽ち刎頸の友とかりし

に悲哉再び相見るを得ざるに至れり。氏は軍人として亦文學者として、實に敬服すべきの人物ありしあり。

其後氏はコロライ及びメンデルスゾーンと共に *Litteratur-brief* (文學書翰) を發刊し、又ラムレルと相謀りて、ロガウスが諷詩の撰拔を企て、傍ら「*プロタス*」なる悲哀戯曲を綴り、又「*フッエスト*」を作り初めたり、併し乍ら此「*フッエスト*」は當時出版されず、後千八百七十七年に至りエンケル氏より「恐らくハレツィング氏の遺失せし原稿からん」として上梓されたるものか、れども果して氏の作あるや甚だ疑ひしく、往々レツィング的戯曲に非らざるの点あるを認め、氏の古昔話フヘムを起艸せしも亦此時代ありとす。

氏アレス
ラウに至
る

然るに間もかく氏の此文學上の事業に嫌厭を來たし、書籍の下に齷齪するを止めて、廣く世人と交際せんとの念盛んに起りしが、折しも嘗てライプナヒに滞在せる砌、クライツトの紹介に、知人とありし、ゲテラール、フォン、クウェンチーンより招かれしかば、更に其友人に告知するとかく、又ベルリッンを去りて、ブレスラウに來り、此處に知事秘書官の職を執り、其時氏は日記帳に書して、「余ハ暫時醜き蠶兒とありて、緒がんと是れ蓋し美麓ある蝶とありて、再び日光に現はれんが爲あり」と言へり、以て氏か當時の心情を知るに幾からんか。

千七百六十年より千七百六十五年迄、氏のブレスラウに於

て知事秘書官の職を務めたりしが、此五年間に於て大に軍人社會の活潑なる風俗に感染し、又之に因りて尤も軍人に於て見安き、獨逸國の氣概を發見し、氏が將來の發達に向て莫大の補益を興へたり。且つ今や氏は衣食の爲に著作するにあらずれば、自由に時間を費して考案を鍊ることを得、爰に畢生の傑作とも云ふべき、ミンナア、フォン、バルンヘルムを綴作せり。之れ則ち軍人淑女の好摸範にして、尤も好き獨逸人の性質を寫せるものあり。亦彼の有名なる「ラオコン」も、此處に所て起艸せるものあり。

併るに彼の大戦争平和の局を告ぐるや、氏の職務稍々煩雜とありて、之に堪ゆる能はざるに至りしかば、千七百六十五

第四回ベ
ルリン行

年の初めに於て、遂に其職位を辞し、又ベルリンに歸れり。」
氏の從來其収入に依りて家族を扶養せしかば、左ききたに
餘裕なきに、又私費を以てプレスラウに、随分藏書に富める
圖書館を設立せしが故、ベルリンに來りし時の囊中已に空
欠を告げ、再び衣食の爲に著作せざる可らざるに至れり。左
れば氏は直に彼の「文學書簡」を完結し、亦「ラオコン」を續綴し、
之を以て漸く一時の急を補へり。

氏の已に久しくベルリンに在る帝國書籍館の長たらんと
の希望を有せしが、今や世人も大に氏を尊敬し、氏が從來の
文學上の勳功に報ひんどの念慮より、其職位を興へんどの
傾向を生し、種々の側よりフリードリヒ、デル、グロッセに、氏

を用ひんことを勧めたり、併し乍らフリードリヒの之を聽か
ず、名も無き無學無智の一佛人に其職位を興へたれば、氏の
之を見て非常に激昂し、其が爲め自然此首府に住することを
屑とせざりしが、恰も好し其以前、或る地方より、招かれて、若
し書籍館長の椅子を得ずば、其招きに応せんと約せしもの
にして、則ちハムブルヒに於て獨逸國民的の劇場を設立し、
氏に其座付の作者兼評議員たらんを乞へるものあり。於是
其招聘に應し、直にハムブルヒに向て出發せり。

氏ハムブルヒに在
り
其主義を發揚せんと欲し、千七百六十七年四月ハムブルヒ
に來り、爾來一身を此新事業の爲に犠牲として、専ら其整頓

と相知りて、戀愛の情禁する能はず、遂に女と結婚せんと決心し、其か爲め伊太利旅行の希望を變し、或る常定の職を求めて、活計の資を得ざる可らざるに至りしが、折しもブラウンシュウワカヒの皇太子、氏をウオルフエンビユッテルの圖書館長に招くに會せしかば、直に其職位を受納し、ウオルフエンビユッテルに赴けり、併し乍ら僅に六百ターレルの給料にして、當時の今日よりも一層世上に懸隔して、寂寥たる此一小都府に生話するの、氏に取りての實に悲しむべきの位置と云ふべし。氏がエプア女を戀愛せるの實に四十歳の時にして、常人に比すれば、其戀情發達の速きを見る、加之エプア女の財産の、前夫死去の際甚だ混雜して、未だ全く女の有に歸する能はずり

モウオル
フエンビ
ユッテル
の圖書館
長とふる

しかば、直に結婚の運びに至らず、合衆の舉を見るを得しり、漸く六年の後にて在りき、氏がウオルフエンビユッテルに來りて後も互に相往來して、懇談慰諭益々愛情を温めたり。

ウオルフエンビユッテルに來りてより、一年間の其委任されたる圖書館の整頓に従事し、錯雜散乱せる藏書を綿密に穿鑿して、一々之を通讀し、部類排置を確然たらしめたり。其勉強の結果として、*Zur Geschichte und Literatur* (歴史及び文學に就て)と題する一著現われ、亦永年熟考せる「エミリア、ガロッター」も此處にて完結せり。

千七百七十五年、氏のエプア女ウァーンに在りて病めりと聞き、之を見舞はんが爲めウァーンに至りしが、偶々フアンシュウ

ンシュウ

伊太利旅
行

ワイヒの皇子レオポルドより、伊太利旅行に随伴せんことを命せられしかば、エプア女と別るゝとの悲しからざるにあらねど、永年の希望を充たすを得ると云ひ、且つ、恩ある皇子の命あれば、其旨に従ひ、皇子等と周く伊太利の勝地舊跡を探り、大に詩想を發達せしめ、歸路ミューンヘンにて一行と袂を分ち、獨りウザーンに立寄りしに、エプア女已にハムブルヒに歸りし後ありければ、直にウアルフエンピユッテルに歸れり。

氏の結婚

千七百七十六年十月氏のハムブルヒに至り、エプア女と合衆の式を挙げ、相携へてウアルフエンピユッテルに歸り、琴瑟相和し、鴛鴦相親しみ、茲にレツシング氏の生活に一層の光彩を添へたり。

併し乍らウアルフエンピユッテルに於ける六年間の生活の、氏か生來強壯ある健康を害せしと實に少からず。之れ蓋し其職務を熱心整理せしに因ると雖も、其勉強の結果は空しからずして、氏の給料の二百ターレルを増加し、都合八百ターレルを得るに至り。加之夫人エプアと團樂和樂の生活の、大に氏ノ精神を壯快ならしめ、稍々其健康を恢復するを得たりしかど、寸善尺魔の氏も死るゝ能はず、此幸福ある生活の實に一刹那に過ぎずして、非常の悲嘆の氏の前路に横のれり。千七百七十七年、氏の實に云ふ可らざる悲境に陥り、其が爲め生命の幾分を減縮せりと云ふべし。則ち夫人エプアの結婚後間もなく懷妊し、クリスマス（十二月三十一日）の夜に當りて一子

を分娩せしに、嬰兒の二十四時間後直に死去し加之夫人も産後の惱み重く、再ひ起つ能はずして翌年一月十日遂に不歸の客とあれり。左れば前に愛兒を失ひ、今亦最愛の夫人を先立てし氏が胸中の悲嘆の能く凡筆の盡すべきにわらず。夫人エプの肖像及び前後爾夫に對する牒はしき關係のアルフレット、シチチより公にされたる、Briefwechsel Lessings mit seiner Frau (レッシンクと其夫人との書狀往復)に審あり。

夫人死去の後 *Fragmente des wölfenbuetelischen vngenannten* (ウナルフエンビユツタルの無名物の片碎) ハムブルヒに於て死去せし博士ライムス氏の著 を公にせし

氏最後の筆戦

事に因りて、文學上の新争論を引起せしが、氏は其書中基督教の上に攻撃を向けたる箇所を、殊に望を以て出版し、出來

得べき丈速に、せめては己れの生涯中に、其に對する辨駁書を見るを得んと欲せしかり、其後續々反對説出しも、多くの取るに足らず、只ハムブルヒの牧師ゴエナエ氏の烈しき攻撃、漸く此論に對する辨駁と稱すべきものありしが、之れども氏の直に「ゴエナエの敵」と題して、容易く其説を論破し、大に勝利を得て、茲に筆戦の局を結び、稍々其希望を充たせり。氏の斯く精神を勵ます筆戦に従事して、夫人を失へる悲哀の心情を慰せんと欲せしが、其結果の反て、氏の健康を殺さ、遂に病を得て精神混濁し、人事を辨別する能はざるに至りしかば、ハムブルヒ、ブラウンシュエイヒ等に旅行して神氣を養ひ、程無く全快するを得たりしか、其効も長く、永續せず

氏の死

して間もなく眼力に非常の衰弱を来たし時に黑白を辨する能はざるとありき。

死後の名譽

左なきだに氏の衰弱せる身体今日迄漸く注意と攝生にて維持せしものなりしに千七百八十一年二月の初めに當り、ブラウンシュワイヒに於て些細の過失より身体を毆打し、初めの左程の事とも思はざりしが、剛らざりき其疼痛氏の生命を奪ふの原因となりて遂に二月十五日溘焉長逝す實に享年五十三歳あり氏の死去するに當りてや家に余財なく、僅にブラウンシュワイヒ侯の惠興に依りて其葬式を執行せし程にて、賊に憐むべき境遇ありしと雖も亦死して余榮ありと云ふべし加之千八百五十三年ブラウンシュワイヒに

氏の立像建設せられ其表面に *Dem grossen Denker und Dichter aus Deutschland* (獨逸本國が大思想家大作詩家に)の數字を刻す。嗚呼氏の生命の己に百年の古昔に於て終ると雖も其著作と立像の尙今人の眼に映す亦盛あらずや蓋し其立像の有名なる技術博士 リーナエル 氏の手に作れるものあり(氏千八百〇四年十二月十五日ブルスニツに生れ千八百三十二年以來ドレスタゲン技術大學の教授となり千八百六十一年二月二十一日死)

ヘルデル傳 (Herder)

ヨハン・ゴットフリード・ヘルデル氏の千七百四十四年八月二十四日東普魯亞のモールンゲンと云へる小都府に生れぬ。

ヘルデル傳

父の貧兒院の教師にして、兼ねて基督教會の鳴鐘並に唱歌の役を勤めたり。氏幼にして才智己に凡ならず、常に両親の教示したる處よりの多く理解して、其智識の發達の、寧ろ教育の區域を越へたるものゝ如し。

氏の幼年

稍々長するに及んで、氏の其父の前例に習ひ、牧師の教育を受くるとありて、博學温厚なる傳道師ウッラルモイ(有名なる詩人ウッラルモイ第二世の父)の許に至りて、全く宗教的の教育を受けしかば、氏が神學上の智識の、夙く己に發達したり。又氏の當時グリンムが長たりし羅甸學校に入りしが、其時より己に嗜書家の稱を得たる丈ありて、書籍の目に觸るゝ限りの場所と時とに拘りらず、直に之を播きて、初めより

終りまで、悉く讀み了らでの措かず、されバ又其嗜好を妨げられんことを慮りて、多くの起て庭園に出で、蒼々たる樹下にイみ、潺々たる水邊に坐して、靜かに讀書の娛樂を盡し居たり。

氏の讀書に次での嗜好は、則ち音樂にして、氏の熱心に之を研究し、頗る其技にも達したりと云ふ。

氏トレンシヨの助手
となる

千七百六十年、當時有名なる神學者セバスタヤン、トレンシヨ、ウッラルモイの繼續者としてモールンゲンに來り、牧師の職位に就きたり。此際トレンシヨは其職務の傍ら、著作事業に従事し居り、爲めに一人の助手を求めたりしが、ヘルデル氏を見て大に其適當あるを知り、遂に之れを雇ひ入れたる。氏が

此招聘に應じて、トレシヨが著作事業を助けし、實に十七歳の時ありき。

氏の此より圖書館掛を命せられぬ。されば其事務の一層繁忙を加へたりと雖も、氏が例の讀書癖を満足せしめんにより、反て便宜を得たるが如し。氏の好んで新古の詩歌を玩味せし中に、クライスの著の第一の愛讀書なりき。其後トレシヨの氏が勉學あるに感じて、其息子等が爲に設けたる、希臘并に羅句語の講筵にも、氏を加へて共に研究せしめぬ。於是氏の古語を學ぶの時機を得、喜悅措く能はず、熱心に勉強せし程に、遂に眼病を惹起すに至れり。此は千七百六十二年の春の事なり。

氏コエニ
グスベル
ロに出づ

當下此處に冬籠せし魯國軍隊付の外科醫に、シユウルナエルロ
I ある人あり、ヘルデル氏は其眼病を癒さんが爲に、トレシ
ヨの紹介を得てシユウルナエルロの許に至り、懇ろに其療治
を乞ひぬ。然るにシユウルナエルロの、此少年の性質温良にし
て、其才氣の非凡あるを愛し、或る時氏に向ひて、先づ自己と
共にコエニグスベルヒに至り、後ペーテルスブルグに赴きて
醫學を修めんことを勧めたり。此時氏以爲らく、吾兼てより
大學に入りて、専ら身を學事に委ねんと欲するも、家貧にし
て希望を全うする能はず、常に遺憾に思ひしが、今此シユウル
ナエルロが勧むるこそ幸かれ、兎も角も彼が言葉に従ひて、
共にコエニグスベルヒに出でん。縱令吾が學ばんと欲するも

ヘルデル傳

の、彼が勤むる所の醫學に、あらざるも、徒らに此地に止まりて、終身埋木と成らん、に優るべしと、遂に千七百六十二年の夏、シュワルツェルローに從ひて、コニグスベルヒに赴き、醫學を修むる事となれり。

氏解剖を
見て失神を
す

於是氏の暫らく醫術の講演を聞き居りしが、或る時死体解剖の席に臨み、其慘憺たる光景を見て、恐懼の餘り失神絶倒せし事あり。是實に笑ふべきの一事なりと雖も、亦以て氏が性質の一斑を察知するに足らん。左れば氏の此後斷然意を決して醫學を棄て、兼ねてより切望せし神學を執れり。此が爲めに最早シュワルツェルローの惠興を受くると能はずと雖も、自ら私宅教師となりて若干の報酬を得、傍ら郷里の朋友

氏大學に
入る

等より少許の補助を受けて、茲に學資も潤ひしかば、遂にコニグスベルヒ大學に入りて、哲學科の學生とされり。氏が此時好んで聽聞したる、有名なる哲學者イマヌエル・カント（千七百四十四年生、千七百八十四年死）が講義なりしあり。

氏の又書買カントと交を結びしが、カント大に氏を信用して、必要の書類を多く惠與せしのみならず、亦多くの益友を紹介して、氏の爲に便益を計りしと少からざりし。左れば氏が収入とて元より僅少なるとされば、時として大に貧困に陥り、氏が後自白せし如く、一塊の麵包にて數日を経過せざるべからざる程の有様ありき。されども問も無く或る人の周旋にて、コルレギウム、フリードリッヒヤムの教師

とあり、聊か餘裕ある資金を得るに至れり。
 元來氏の親切丁寧にして、頗ぶる教授術に巧みありしかば、
 學生の尊敬すると大方ならず、徳望日に高きを加へたり。其
 後又或る豪家の知遇を得、氏の其家に同居するるとあり、自
 是幸福ある生活の端緒を開きぬ。

此等の波瀾に依て、氏が生來の怯弱ある性質の全く打破さ
 れ、稍々男らしき氣性の次第に發達するを覺えたり。

加之氏の遂にカントの知る所とあり、其講義を無報酬にて
 聴くを得せしめたるのみならず、氏をして其著作事業を
 も助けしむるに至れり。之れ蓋し氏が吐く所の議論の、頗る
 カントが意に投せしが爲ならずんばならず。

氏カント
の知遇を
受く

ハーマン
トの交際

且つ氏の此所に於て、先輩ハーマンとも懇意に成り、カント
 氏との交際よりも一層親しく、果の水魚も嘗ちらざる間柄
 とありぬ。されば氏がハーマンと交を結ひて後得たる所の
 利益の實に僅少にわらず。シェンスピヤー、オッシアンの著書を
 研究し、又幼時己に聖書に因りて、其萌芽を出したる國民的
 詩想を、益發達せしめたるが如きの、全くハーマンの賜物に
 して、氏が他日獨逸文壇に雄飛し、芳名を万世に垂るゝ至り
 しも、ハーマンの感化與て大に力あり。

リガ市滞
在

千七百六十四年の秋、氏のハーマンの推舉に依り、リガ市に
 於ける寺院學校の教師とありしが、例の教授術に巧むると
 と、親切丁寧あるとどの、直ちに生徒をして、心服せしめたり。

此時氏の又説教者として、屢々教會堂に現われ、大に聴衆の心を動かせしかば、名聲忽ちリガ市に充ち渡りぬ。抑も此リガ市と云へるは、繁華ある商業市にして、俗塵紛々たる所ありと雖も、氏の善く市民の氣風、社會の狀態等に注目し、國家的觀念を開發せしむるの利益を得たり。

氏がリガ市に於ける生活は、頗る平和にして且つ愉快ありし。

千七百六十七年の初め、氏のサントヘーテルスブルグに於けるペーテル學校の校長として招かれたり。此時氏の之に應せんどの意無きにあらざりしが、リガ市民頻りに氏の去るを惜みて、只管之を止めしかば、氏も強いて去るに忍びず、遂

に其招聘を辞してリガ市に止まり、校長並に牧師の職を務めたり。

著の第一

此年氏が *Fragmente zur deutschen Litteratur* (獨逸文學管見) なる一篇、*レッシング* 及び *Litteraturbriefe* (文學書簡) の附録として現はれたり。此は從來及び將來の獨逸文學に付て、氏が意見を論述したるものにて、蓋し氏が文壇に登りたる、第一著の事業ありしなり。尤も此一篇の、己に氏が *クレーニグスベルヒ* に在りて時綴り置きしものあるを、此度世に公に示したるは、*レッシング* が暗に奨励せし故ありと云へり。

然れども氏が批評文の、*レッシング* が批評文の平易簡明あるに似ず、抑揚比喻頗る脩辭的文字を以てせり、一言以て之を

氏レッシングの批評の著

評せば、彼の客觀的にして、是の主觀的ありしが如し。

千七百六十九年に於て、氏の又批評的の一著を著せり、則ち Kritische Wælder (批評の森林)と名けて、直接にレッシングの「ラオコン」に就て論し、現時の有様より古代詩人の事に及ばし、殊に古代の志想を理解せざる佛人が「ラオコン」の解釋に攻撃を試み、尙其第二第三卷に於て、更にシロツツに攻撃の論鋒を轉じたり。然るにシロツツの破廉耻なる手段を以て、氏に非常なる耻辱を與へたりしかば、氏の之を無念に思ひ、心中鬱々として、樂まず、遂に其位職を捨て、他國旅行を思ひ立つに至れり。之れ蓋し佛國を初め、ホルランド及び全獨逸國を編歴し、諸國の教育制度を觀察して、取捨選拔し、再びリガ

に歸りて、其尤も善良完全あるものを此所に公布せんと企てたるあり。左れば、氏の此年の六月に當りて、其職を解き、リガを出發し、ナンテスに向つて航せり。此航海の氏に愉快を與へたるもの、晩年に至りて公にせし旅行日記に記して明かあり。

パリス行

四月月間ナンテスに滞在して、直に佛國パリスに至れり。此所に於て、氏の數多の名士と交際を結び、就中 Encyclopaedist (學士會)の人々と相往來せしが、其中にもナドロート氏との交わり尤も深かりき。斯く此滞在中數多の益友を得しのみならず、又有益ある事物の觀察に其時間を用ひ、圖書館博物館の云ふに及ばず、好んで當府の劇場に臨み、佛國演劇に

就て發明する所ありたり、氏が後日佛國演劇の佛民固有の志想が發達して現時の体裁をなすものなれば、今更獨逸人が之を模倣すると能はずとの意見を吐くに至りしに、蓋し此時に於て認めたる所からんか。

千七百六十九年の末に當り、氏のプリンツ、フォン、ホルスタインの佛國及び伊太利旅行に隨伴すべきの請求を受けたり。當時プリンツの氣鬱病に悩み居たりしかば、聊か氣散の爲めに企てられたる旅行にして、氏の其案内者監督者の任に當てられたり。氏の此請求を容れて佛國を去り、ホルランドを過ぎハムブルヒに至り、暫時此所に滞在せる中に、レッシンク及びクラウヂユス等の名士と相知るを得て、後キールに向て出發せり、蓋し此所にてプリンツ等に會せんが爲めあり。

氏カロ初
めて子
ら相見

翌年七月に於て氏のプリンツ等と旅途に上り、先づハムブルヒ、ハンノーフェル、ゲッタンゲン等を過ぎダルクムスタットに來りしが、此所に氏の軍議官メルツ氏の家に於て、其將來の夫人カロリーチ、ファルスランド嬢と初めて相見、己に此時よりして互に戀愛の意を起せり。それより氏等の一行のストラスブルグに至りしが、此所に於て氏のプリンツの侍官と不和を生し、且つモールンゲンに在りし時悩みたる眼病再發し、旁々以てプリンツの一行と袂を分つ余義なきに至りしかば、遂に隨伴を辭して此處に止まり、眼病を療養せんが

爲めに随分苦しき手術を受けしが不幸にも全快の目的を
達すると能はざるのみならず、反て氏の精神上に變更を受
け、往々輕怒の舉動ありき。

ゴッテ
の文

併し乍ら聊か氏を慰めたるは、若年なるゴッテ氏(當時二十歳)
にして、當時法學生として此所に在りしが、暫くして相知る
を得、嘗に文學上のみならず、亦友義上刎頸の交わりとあり
しとあり。之れ氏に取りても元より無益と云ふにあらざ
りしかども、反てゴッテ氏がヘルデル氏より受けたる技術
上並に精神上の感化の、蓋し少々にあらざりき。

此處にて氏の *Ueber der Ursprung der Sprache* (言語の起源に
就て)ある一篇の著を爲せしが、ベルリン大學より賞金を得

たる程にて、文學上に一方からざる利益を興へたり。

此間に於て氏の亦オシアン、セキスヒーヤの著及び希臘の
古書等を繙き、殊に氏の尊敬せるシロップストンの著を讀み
しが、之れ聊か旅窓の鬱を散せん爲めありしが、反て氏の詩
想を發達せしめたるに大なりき。

氏の宮殿牧師の長
アアルゲツ
の宮殿牧師の長
アアルゲツ
の宮殿牧師の長
アアルゲツ

氏が以前ダルクムスタットに在るの時、ウガルヘルム、フォン、ビュッゲ
ブルグ伯より、宮殿牧師并に寺院長の職位を以てビュッゲ
ブルグに招待されたりしが、爰に初めて承諾の返書を送り、千
七百七十一年ビュッゲブルグに來りて其職位に就きしに、氏
が豫想せしど、全く反對に出で、伯の其權威を蓋に、高慢を
る舉動多く、且つ氏の勸告する言の一も容れられず、稍々不

快の感を惹起せり。去ども其夫人の温和敬愛すべき婦人にして、大に氏を尊敬し、漸々相親しむに隨て、伯との間も大に和き、漸く親密とあるを得たり。此所に於て *Aelteste Urkunde des Menschengeschlechts* (人性の原則) *Zur Philosophie der Geschichte der Menschheit* (人間變遷の哲理に就て)等の材料を集め、又國歌の事に意を傾け、獨逸國のヒメ其他の諸國の之に關するものを聚萃し、且つ千七百七十三年に至り、ゴエター并にメーセルの両氏と相結托して、*Von deutschen Art und Kunst* (獨逸の風習及び技術に就て)雜誌を發刊したり。

氏の結婚

此年氏の彼の戀人フォルスランド嬢と階老の式を挙げ、其生活上に新らしき光彩を添へたり。之れ實に氏が三十歳の時

ありとす。

氏の宮中
牧師、大
僧正と
ある

今や氏の名聲稍々世人の知る所とあり、オ、ナン、ギーゼン等の地方より招待すると頻にして、殊にゴツチンゲンよりの千七百七十四年以來氏の來遊を乞ふて止まず、爲めに勸誘盡力する人も多かりしが、偶々ワイマル侯の宮殿に客友として滞在せるゴエターの推舉に依り、ワイマル侯より宮中牧師并に大僧正の職位を以て招かるゝに會ひしかば、氏の其招聘に應じ、千七百七十六年ワイマルに赴けり。當時此所にゴエター、ウ、フランド、シ、チベルの諸氏ありて、シルレルも亦千七百八十七年に至り來會す、カル、アウグスト侯の下に、彼のワイマル文學俱樂部を組織せるの時ありしかば、氏も亦其一

ワイマル
文學俱樂部

ヘルテル傳

人として名聲愈々高く遂にワイマル俱樂部中第三の地位を占むるに至れり。

氏の職務の充分繁雜多端にして、若し常人ありせば、全力を之れに委するも、尙不足を恨むべき程ありしにも係ならず、氏の毫も其職務を怠滞遅延せしむるとなく、傍ら亦盛に文學上の事業をせり。則ち *Volkslieder* (國歌) *die Lieder und Lieder* (歌と愛) 殊に有名ある *vom Geist der hebraischen Poesie* (フリー詩歌の精神等) 皆此ワイマル滞在中、繁務の閑を偷んで綴作せしものあり、以て氏が心中常に餘裕あるを知るべし。

斯く氏の名譽ある職位を有すると共に、又文學者の一人と

伊太利旅行

して、大に世人の尊敬を受くるに至りしが、己に従前より氏を惱ませし眼病の、氏の精神を著しく變更せしめ、短氣輕怒なる性質とありて、甚だ親しかりし *ゴエター* とも不和にあり、又 *シルレル* との相結托するを得ず、只老練洒落ある *ウッラー* の氏を慰諭勸導して、稍々親密の交際に在りしのみ。氏に豫ねて伊太利に旅行せんと希望を有せしが、遂に千七百八十八年の夏に至り、*フォン、タールベルヒ* 男と共に伊太利に赴き、偶々 *ローマ* 府に滞在せる *ワイマル* の女侯 *アマリア* に會し、共に *チャプル* 等を旅行して、茲に其宿望を遂けたり。伊太利滞在中、氏の *ゴエツタンゲン* より大學教授并に大學付牧師の職位を以て招かれたりしかば、其招聘に應せんと欲

したりしも、ワイマル侯再び歸り來らんとを留めて止まず、氏も遂に否み難く、千七百八十九年再びワイマルに歸れり。其後の氏の著作の *Idee* (理想) *Brief zur Befoerderung der Humanität* (慈善を奨励するの書) 及び *歌舞の神* と名付けて、*パルタス* の詩歌を翻譯せしもの等にして、亦數多の哲學上の著作を爲せしが、氏の最初 *カント* の下に在りしにも係りらず、其著作の *カント* 派の人々より大に攻撃されしと云ふ。

氏は族に
列せらる

千八百〇一年に於て、氏の寺院議會の議長となり、且つ撰擧侯 *フォン・バイエルン* より貴族に列せらるゝに至れり。此頃より氏の身体の非常に衰弱し、加ふるに眼病愈々重くなりしに、恰も千八百〇三年五月馬車より落ちて益々健康

を害し、遂に神経病及び胆汁病を惹起すに至り、*エゲル* の温泉に浴して療養せしかど其功を見ず、千八百〇三年十二月十八日遂に不歸の客とされり。時に齡正に六十歳なり。蓋し氏の *ワイマル* 俱樂部中、第一の早死者なりとす。

千八百十九年に至り、*カル・アウグスト* 侯氏の墓碑に *L.I.L.* (*Licht, Liebe, Leben*) (光愛生の三字を題せしめ、以て *ヘルデル* 氏か文學上の偉勳を稱揚せり。

氏が死後
の名譽

又千八百五十年八月二十五日、則ち氏の誕生日に當つて、氏の偉業を示すべき立像は、*ワイマル* に於て健立され、且又氏が未亡人の *Erinnerung aus Herdersleben* (*ヘルデルの記念*) する書を著りして、細かに良人の一生を叙したり。

ゴッテー傳 (Goethe)

氏の幼年

ヨハン、ウァルフガング、ゴッテー氏の千七百四十九年の八月二十八日、マイン河畔のフランクフルト府に生まる。氏の家は元來職人の家柄にて、曾祖父の鉄蹄を業とし、祖父の裁縫師あり(後に旅籠屋となりしが)然れども父ヨハン、コンパル氏の代に至り、次第に仕上げて遂に同府にても屈指の紳士となり、家富み人望もありて、Kaiserlicher Rath (帝國評議官)と云へる稱號を得し程あり。氏が母あるカタリテ、エリサベスの性質爽快なる婦人にて、尤も交際談話に長けたりしが、氏が詩人たるべき仕格、乃ち富饒ある想像力と美妙ある觀察

力との全く其母より遺傳し來れるものあり。氏が父の寧ろ嚴肅ある人にて、氏が幼時の教育の如きも、専ら自身に之を行ひ、務めて小兒の獨立心を養成せんと計れり。左ればこそ、氏の夙に羅甸、希臘、佛蘭西、英吉利、伊太利等諸國の語に通じ、又希伯來語をも學ひて、聖書の如きの其原書に就て研究し、就中詩篇の氏が平生好んで讀む所なりしと云ふ。

此のみならず、氏が郷里あるフランクフルト府の、古來繁榮ある市街にて、歴史的の紀念物にも富みたれば、大に客觀的の詩想を肥せしのみならず、其頃大守の美術を好めるまゝに、同府に招集されたる畫工彫刻師等も多かりしかば、氏の此等の人々と交際して、其美術志想を養成せしめたるも

少きからざるべし。

氏の就學

斯くて千七百六十五年、乃ち氏が十六才の秋、初めて家庭教育の範圍を脱してライプナヒ府に遊び、同府の大學に入て法學を修むるにありしかども、氏の更に之を好まず、亦哲學、史學等の講義も、元より氏が快しとする所にあらざれば、且て満足を與へず、却て氏か同府の交際社會に立入り、華美ある風俗を實地目撃せしに依て、大に得る所ありしが如し。然れども、只美學のみ、氏の好む所ありしかば、熱心に之を研究せり。

此地に在りし時、初めて戯曲を綴ることを試み、乃ち千七百六十七年(氏か十八才の時) *Die Laune des Verliebten* (戀人の變心)

氏初めて
著作に著
手す

を著す。此の氏が當時馴染みたる酒屋の娘ゲートヘンとの關係を叙したる者あり、其の翌年又 *Die Mischuldigen* (同罪人) を著す。此の氏が郷里及びライプナヒ府に於て目撃したる道德の腐敗を面白く仕組たる滑稽劇なり、而して此二書共、氏の凡て佛蘭西戯曲の法に倣ひたるものあれば、尙之に依て氏が平生心頭に感ずる所、苦と亦く樂と亦く、皆之を詩想的の材料として觀念し來れるを知るに足らんか。他日寫實派を以て稱せられたる、蓋し偶然にあらざるあり。此他小篇の歌謠數多著したれども、且て氏の本名を公にせざりしかば、當時の人の未だゴエターあるを知らず、此の無名の詩人が、他日獨逸一國のみならず、歐洲全体の文壇に於て、

其主座を占むる者ありとの、殆んど夢にだも悟らざりしが、らん。

氏病を得
郷里に歸

千七百六十八年の夏の末に至り、不圖したるとより病魔の侵す所とあり、一端の吐血甚しく、生命も危きまでありしが、天未だ希世の才子を捨てず、やがて快方に赴きしが、其れより暫く學事を廢し、郷里フランクフルトに歸り養生するるともあれり。其間常に母の友人あるカタリナ、フオン、クレックテンベルヒ嬢の懇切ある介抱を受けたり。

氏スト
ラヌブル
に遊ぶ

斯くて全く健康に復せしかば、千七百七十年ストラスブルヒ府に赴き、此度も父の命に従ひ、引續いて法學を研究すべき爲ありしが、氏の朋友に導かれて、法學の傍ら、亦醫學及び

ヘルデル
氏の交

博物學等の講義をも聽けり。此地に在りて氏のレンツ、レルゼ、コンツスナルリング等の良友を得しが、右の他氏に重大ある裨益を興へたるは、ヘルデル氏との交際ありしかり。ヘルデル氏のゴテー氏と比して、纔かに五年の年長されども、經驗も學識も遙かに秀てたりし。氏の此人に勧められて、希伯來の詩學、ホメール、オッサン、シユジスヒーヤ、ゴルドスミス等の著書を學んで、益文學研究の希望を固ふし、又ヘルデル氏が其頃發明したる「詩歌の二三才人の腦中より起るものにあらずして、一般國民の胸裡より自然涌出すべきものなり」との説を聞き、國風俚歌の貴ぶべきを悟り、乃ち當時の俚歌に倣ふて Heidenroslein (野の薔薇)の曲を作れり。其他文學

ゴテー氏

上有益の卓論新説を聴きて、大に自家の詩想を發達せしめたるの、全くヘルデル氏の賜物と云ひざる可らず。

フリーデ
リーの
關係

爰にストラスブルヒ府の近在あるゼッセンハイム村の牧師の女に、フリーデリーケ嬢あるものあり、容貌秀美あるのみならず、性質も亦伶俐にして、實に一箇の可憐女あり。ゴッテ氏と情を通じて、其間殆んど漆の如く寄りしが、ゴッテ氏の多情ある、後遂に約に反して嬢を娶らざりしかども、嬢の尙貞節を守り、生涯寡婦を以て終りたり。

ゴッテ氏か此嬢と交際せし頃作りたる詩歌の、概して艶麗なる悲歌のみにて、Will kommen und Abschied (歡迎と離別) An die Erwaehnte (撰み出せし者に) Mailed (春の歌)等の如きもの

の、其真情より涌出でし愛情の濃かある、一讀三嘆すべきものあり。蓋し此の皆氏がゴールドスミスに倣ふたるものありと云ふ。ストラスブルヒ府に遊學中、氏のミンスター塔を見て大に感ずる所あり、夫れより建築學を研究して、Von der tschen Baukunst (獨逸建築術に就て)の一篇を著し、其他氏が他日「ゴッツ」及「ファウスト」の大著ありしも、其材料の大方此のストラスブルヒに在りし時に得しものゝ如し。

千七百七十一年に至りて、氏の遂に法學士の學位を得、郷里フランクフルトに歸りて、免許代言人とされり。然れども其好む所に從て、首として詩學を研究し、文學社會の交際を喜び居たれば、本職の法律事務の却て片手間の如くされり。

氏初めて
社會に出

此頃氏のシュロツセル氏(ライプツヒに在りし時知己とされり)の紹介に依て、メルムスタットの參謀官メルク氏と交誼を結ひたり。メルク氏の身軍属あるにも係らず、至て美術思想に富める人ありしかば、之れ亦ゴエター氏に裨益を與へたる、蓋し少からざるあり。

千七百七十二年の春、ウエツツラル府に赴き、裁判處に事務を採りしが、四月にして歸り、その翌年乃ち七十三年に至りて、遂に彼の Goetz von Berlichingen (勇士の名)の著あり。此書の蓋し氏が詩人として世に公にせし第一の著にして、之に依てゴエター氏の名一時江湖に錚々たり。

氏の名初
にめて文界
に現はる

Goetz von Berlichingen の氏が材料を千五百年代のフロンケ

の勇士ゴエツの自傳より採りしものにて、彼のシエンスヒーヤを摸範として作りたるものかれども、其不規律あるとに至る、或ハシエンスヒーヤにも勝れりと云ふ。嘗て氏のストラスブルヒ府に在るや、勉めて材料を採集し、己に一篇の戯曲とあし置たるを、後又潤刪を加へて、外題も斯く改めたるあり。此曲各齣皆勇壯快活に叙しあれども、惜哉大に戯曲の經濟順序或ハ規律を云ふ意を欠きたりと云ふ。如何となれば、氏の此戯曲を綴るに、彼の所謂時代及び場所の一位と云ふ事を忘れ、徒らに隔絶したる場所、隔絶したる時代を記したればあり。然りと雖も、此著の出るや、世人争ふて之を愛讀し、一時紙價をして騰貴せしむべき勢ありしかば、忽

ち文壇に一波瀾を生じ、卑劣ある文學者の遊んで勇士の傳奇を綴り、以て時流に媚びんとせり。彼のシルレル氏の Rauber (群盜) の出でし時も、文學社會忽ち無味淡泊なる盜賊小説を以て埋まれり。時の古今地の東西を問はず、此卑劣文學者の摸倣を旨とし、驥尾に就て得々たる、惜むべく亦憐むべきことあり。

氏の次で Leiden des jungen Werthers (若きウエルタルの不幸) を著せり。此の一篇の傳奇にして、其材料の概ね自家の閱歷より來れり。先是氏がウヰッラル府に在るや、或時踏舞會に出て、フッフ氏(同じく裁判處に勤めし人?)の娘カルロッテと懇意にあり、爾來情交漸く親密にして、稍々離れ難きの思あり

しが、後此嬢は氏が友人なるケストナル氏(ブレイノン公使館の書記生)の許嫁ありと聞き、到底意を達す可らざるを知り、愛を割て郷里に歸りたれども、愛慕の情益々切にして、全く斷念するに能はず、心緒乱れ來て煩悶の余り、密かに自殺を企てし程ありし。恰も此時同じ裁判處に勤め居りしエルザレムと云へる若者、世を味氣さく思ふて、短銃を以て自殺を遂けたり。此報を聞て氏も大に悟る處ありしが、又同感の情に堪へず、遂に此等の事を仕組みて、此傳奇を綴るに及び。左れば其主人公ウエルタルとは、一半は彼のエルザレムにして、一半はゴエター氏自らあり、又篇中所謂アルベルトとはケストナル氏の變体にして、ロッターとハカルロッター嬢の

化身なると元より論を俟たざるべし。此書も大に世人の愛玩する處とあり、批評家は懇切に之を批評し、翻譯家は熱心に之を翻譯し、例の卑怯文學者は勉めて之を摸倣し、遂に當時の文學界に、ウエルテル熱なる一種の流行病を醸すに至れり。加之又青年血氣の輩の中には、此書を読み感動のあまり、遂に自殺を企てたるものさへありき。ゴエテ氏の勢力又偉なる哉。

92
93
94

斯くてゴエテ氏二十五才になりし頃、其名漸く都鄙に知られて、當時有名ある人士等、故らに氏の家を尋ね来て、氏と交際を求むる者多し。此等の中には彼の名高きクロップストック、ナリヒ府の牧師ラファテル、氏と共に瑞西旅行をさせし

氏カル、
アウグス
ト侯の知
遇を受く

ストルベル伯の諸氏あり、又哲學者にして傳奇作者あるハインリヒ、ヤコビ氏とは、尤も親密に交わり居れり。然れども氏に取りて最も緊要に又有益なる知友は、ワイマル府のカル、アウグスト侯なりし。氏は此侯の未だ當主にならざりし時、フランクフルト府にて初めて知り、其後、カルスルへにて會せしとありしが、千七百七十五年に至りて、ワイマル府ある侯の宮殿へ招かれ、此處に暫く滞在するととせられり。

ワイマル侯カル、アウグストの母あるアマリヤの、フリードリヒ大王の姪にして、十八歳の時己に寡婦とあり、それより十六年間良人に代りて政事を執り、其間嗣子カル、アウグス

トの教育の總てウッラーランド氏に委せ置たりしが、カル、アウグスト侯立て政權を握るに當て、全く閑散の身となり、専ら心を文藝、音樂、繪畫等に傾け居たり、左ればゴエター氏の來りし時も、女侯の喜んで之を迎へ、共に文學的の俱樂部を組織せり。此俱樂部に屬する者の、ゴエター、ウッラーランドを始めとし、少佐クチャーベル侯の弟コンスタンチンの大傳にして、軍人おれども、文學志想を備ふる者、其他宮中の侍臣にして、音樂に達し、文藝に志ある者等あり、後千八百八十七年に至りてシルレル氏も此地に居を移せり。

ゴエター氏がワイマル府に來るや、初めの客分として滞在する筈なりしが、程なく侯の信任する處となりて、樞密顧問官

ワイマル
文學俱樂部

の如きものに任せられ、實に文學上のみならず、政治上の意見をも、總て氏の教示を俟つが如くおれり。ワイマル侯が氏を尊敬せる以て知るべし。

氏のカル侯の許に在りて、斯くまで優渥なる待遇を受けたれども、事務少しく繁に過ぎて、思ひの儘に詩情を養成すると出來ざるより、意常に平あらず、其頃研究しつゝ、ありし骨相學、金石學、植物學、解剖學の如き、氏に充分の満足を興へざりしかば、遂に氏の暫らくワイマルの地を離れ、遠く伊太利地方を漫遊せどん企てたり。此の蓋し氏が年來の宿望ありしあり。

伊太利
に遊ぶ

於是氏のカル侯に暇を乞ひ、先づカルスバードに至り、千七

百八十六年九月二日伊太利を志して發足せり。急がぬ旅を
 れど日を重ぬると又多く、十月十八日に至りて漸くホルグ
 ナに達し、それよりローマ府に入り、暫く滞在して歴史的の
 名跡を探究し、それより再びローマ府に歸れり。斯くて伊太
 利の地に止まると殆んど二春秋、千七百八十八年の四月二
 十二日、愛を割て遂にローマ府を辭し、同年六月十八日、悉
 くツイマル府に歸れり。凡て此二年間に見聞したる事柄の、
 記して *Italianische Reise* (伊太利紀行) に詳あり。

伊太利よ
 り得たる
 新主義

此伊太利旅行のゴエテ氏一生涯の中に、尤も著しき變遷を
 起せるものにて、氏自らも之を精神上の再誕と稱せり。蓋し
 氏が今まで崇拜し來りたるオッサン、シエス、ヒーヤは、於是

ホメル、ソフクレスと代り、凡そ美術なるもの、眞個の根元
 の、普通の自然を摸倣するにあらずして、寧ろ古代の理想
 中にあることを悟り、從來の持論の茲に一變し、隨てその著
 す處のものも、全く面目を改むるに至れり。

此の新主義を執りてより第一着の作の *Iphigenie* (女主人公
 の名) なり。本文の事蹟の、氏が嘗て散文に綴りたるにありし
 が、後伊太利に滞在中戯曲に改めたるものにて、彼の希臘の
 戯曲家オイソピデスも、亦此事を材料に採れり。此の戯曲の
 組織の、一般に素樸にして、自ら古代戯曲の風を存じ、その本
 文、時の只一日中の二三時間に止まり、所のテイヤナの社殿
 の森を出でず、事の總て篇中人物の性質より起り來るやう

叙したれば、彼の時代場所及び事蹟の一位と云ふと、一々備はりて極めて規律正しき、氏が此迄の作中、決して見る能はざる處あり。

此に次て著りしたるを *Die Heimt* (人名) とす。此曲の *ユーデルラ* の勇士 *エグモント* が、身を自由の犠牲となしたる事蹟を綴りしものにて、其第一齡の已に十二年前に起稿したるものありとそ。

次で又 *Torquato Tasso* (人名) を著す。此も以前の散文に綴りたるものにて、篇中現れる、人物、僅に五人に過ぎざるが如き、大に彼の「*イフィグエー*」に似たる處あり。然れども、其事實に至りては、*ゴッテ* 氏自家の経歴より出るもの少なからずと

云ふ。

又 *Roemische Elegien* (羅馬集?) の著あり。此集中 *Gefunden* (發見) の詩の、氏が夫人 *クリスチヤナ、ウルヒッス* との関係を詠したるものにて、譬諭適切あり。夫人の有名なる *Rinaldo, Rinaldini* (傳奇の名) の著者の妹にて、千七百八十八年始めて *ゴッテ* 氏と知り、爾來明友として交際甚だ親密ありしが、後千八百〇六年に至りて、*ゴッテ* 夫人となれり。 *Metamorphose von Pflanzen* (植物の變形) と云へる詩も、亦此の夫人に關せるものと云ふ。此時に當て隣國佛蘭西にて、彼の革命の大乱起り、獨逸國へも影響を及ぼしるに少あからず。此が爲に、氏の又種々の材料を得たり。有名なる *Reinke Fuchs* (譯して狐の裁判) と云へ

るもの是なりも此時代の作に係る然れども此の影響や、のみ氏を益したりとの見えざるなり。カル侯兵を發するに當りて、氏も之に従ふて佛國に對ひ、又マインツを圍みたるとあり。

ゴエテ
ミレシ
ル
レ
ー
氏

ウーラント氏去り、ヘルデル氏隔り、ワイマル府の文壇稍寂然として、ゴエテ氏獨り無聊を訴へ居たりしが、千七百九十九年に至りて、遂に無二の益友を得たり、此乃ち、ヨハン、シリストーフ、フリードリヒ、シルレル氏あり。

シルレル氏の千七百五十九年マルバッハに産まれ、ゴエテ氏に比して十才年少あり。嘗てカル學院に在りし時、初てゴエテ氏を見、千七百八十八年ルードルフスタットに於て再び會

し、氏がエナ大學の教授に任せられしも、全くゴエテ氏の紹介に因れるものなれども、其交際に至りての尙ほ冷淡あるものありし。如何とされバ當時ゴエテ氏の伊太利旅行の後にて、恰も精神上一大進歩をさせし際なれば、未だ初心あるシルレル氏の著書を、心に退け居りしが故あり。然るに同九十四年に至りて、両氏遂に莫逆の友となり、書翰の交換絶間なき程ありしが、六年の後シルレル氏ワイマル府に移り來るに及んで、益々親密に交り、日々相往來し、共に約して懇切に注告し、丁寧に批評し合ひしかバ、金煉られて益々光り玉磨かれて愈々明かに、二氏の進歩の此時に於て、實に其著しきを見たり。然れども二氏決して同一の主義を抱持せる

に非ず、ゴッテール氏は凡て事實に依て理想を構成し、シルレル氏は凡て理想に依て事實を播造す。彼は歸納法を貴び、是は演繹法を用ゆ。是ゴッテール氏は寫實派を以て稱せられ、シルレル氏は理想家として尊はるゝ以所あり。凡て完全なる詩曲は寫實と理想と相待つて始めて出來得るものなれば、今此の二氏が互に異主義を維持せし、却て二氏が幸福ある處なり。否管に二氏が幸福のみに止まらず、後世文學の幸福と云ふも敢て不可ならんや。蓋し此の二氏の性質が斯く差異を生したる、決して偶然にわらず。ゴッテール氏は富家の息子にて幼より自由に發生し、シルレル氏は貧家に生まれ、ゴッテール氏と比して嚴格ある(寧ろ窮屈なる)教育を受けたり。思ふに此

二氏が發育の差異、與つて力あるものゝ如し。

其後ゴッテール氏はシルレル氏と共に「ホーレン」なる雑誌を發行し、大に當時の文學界の進歩を謀れり。之に依て看客の意匠も、その程度を進めたりと云ふ。Der Zauberlehrling (魔法使ひの弟子) Der Schatzgraber (寶掘る人) Die Braut von Korinth (キント嬢の嫁等)ハ此時代の作なり。

當時シルレル氏の専ら意を戯曲に用ゐ居りしが、氏ハ之に反して首にヘンツェン、ロマン、傳奇等の著述に盡力せり。

千七百九十六年 Wilhelm Meisters Lehrjahre なる傳奇を著す。此は氏が二十年前起稿せしものにて、最初の一巻は已に伊太利旅行中に著しせしと云ふ。主人公ハ富豪なる商家の

子息にて、大に演劇を嗜む、其經歷を綴りしものなり。

詠史エヒトクの中にて有名なるは彼の Hermann und Dorothea にて、千七百九十七年世に公にせり。此は氏が材料を Das liebheilige Gera gegen die Salzburgerischen Emigranten 物語の中より採り、時代を佛蘭西革命の頃とさし、獨逸の旅館の子息ヘルマンが佛蘭西の落人に衣食を施與せんとて、ドロロテアなる少女に懸戀し、爲に一時父の不興を被りしが、母及び出入の者の取あしにて、遂に其の少女を妻とさす迄の出來事を綴りしものにて、一種の情史に過ぎざれども、純粹なる獨逸風の家族の有様を寫し出し、能く其の人情を穿ちたるを以て、大に稱賛する處とされり。

此著を終るや、氏は直に瑞西旅行をさせり、蓋し之を以て第二回とす。此際氏は彼の ウッセルム、テルの事蹟を、一篇の詠史に綴らんとを企てしが、仔細ありて之を廢したるを、後千八百〇四年に至り、シルレル氏之を戯曲に編成せり。若しゴテー氏をして初めの企を遂げしめば、今日各國に於て稱美する處の、シルレル氏が一代の傑作の、只ソルレンスタインに止まりしやも知れざるあり。

十八世紀の終りより十九世紀の初めにかけて、シルレル氏は熱心に文事に従事し、雄篇大作の著ありしにも係はらず、ゴテー氏に於ては、寧ろ暫らく休息の氣味ありし。

千八百〇五年と云ふ歳は、ゴテー氏が爲には如何に不幸か

氏親友を失ふ

る歳かりけん氏は無二の親友と永遠離別せざる可らざるに至れり。乃ち氏が好敵手なるシルレル氏は、四十六年を一期として、天帝の許に歸れり。於是氏は恰も其一臂を割かれ、一目を破られたるが如く、悲嘆措く能はず、落膽と憂衰との爲めに、更に一層老衰を覺えし程ありしが、追慕の餘り *Epilog zur Glocke* なる一篇を弔し、亡友の爲に万世不朽の紀念標を其中に築きたり。

氏の晩年

シルレル氏の死後尙二十七年間、氏は詩人として存世せり。然れどもその從事したるは、比較上詩學の範圍内に於てよりは、寧ろ學術的、實業的研究多かりしと云ふ。

氏の自傳

千八百〇九年傳奇 *Die Wahlverwandschaft* を著し、次て *Aus*

meinem Leben, Wahrheit und Dichtung を著す。此は氏が自傳にして、其第一篇は千八百十一年世に公にされたり。其中には氏が生活の有様、詩人とありし順序を委しく記し、われは氏が人と成りを知らんと欲せば、此書に加くものはあらざるべし。然れども此書に載する處に、氏が二十六歳の時、乃ち氏がワイマル府に居住せし時代迄に止まれ、餘り *Italinische Reise* (伊太利紀行) *Dritte Schweizerreise* (第三回瑞西紀行) *Tage- und Jahreshft* (日記) 等に依て詳にするを得ん。

此際恰も獨逸自由戦争起り、士民干戈を事とし、物情方さに恟々たりしも、氏は之が爲に文事を棄てず、更にアラビヤ、ペルシヤの詩學を研究し、後 *Der westöstliche Divan* なる詩集を

編纂せり。又自由戦争の終るや、Les Epiménides Erwachen なる祝祭の劇曲を著りし、ベルリンの劇場に於て之を演せしめたり。

氏は晩年に至りて、尙二種の大著述を成効せり。一を Wilhelm Meisters Wanderschaft とし、一を Faust とす。就中「ファウスト」は世人の尤もよく知れる處にして、氏は之が爲に六十年の日月を費したれば、實に氏が詩人たる一生を通過せしものあり。初めて筆を下せしは、氏が ライプナヒ 大學を辞し、父家に歸りて病を養ひし時に在りて、其の脱稿の効を奏せしは、八十二才の高齡に達せし時、乃ち氏が就眠の前一年に在り。其間折に觸れ思ひに任せて叙し來り、或る時は氏自らも其の脱稿

を危ぶみし程なりしと云ふ。本篇は「ファウスト」ある學者の一代記にして、或時は情に迷ひ、或時は利に走り、千辛万苦を嘗め來て、遂に眞正の幸福に達する迄の事を、自家の經歷と哲學的の理想とを混和して、愉快に綴りたるものなれば、實に一種の所世哲學と云ふも敢て不可あきまり。全部を前後二篇に分つ、而して前篇の後篇に比して興味多く且つ解し易し。是蓋し壯年血氣の作されば、情を先にして理を後にし。後篇は晩年着實の作されば、理に訴へて情に疎く。乃ち前者の花麗に後者は素樸なるか故ある可し。嘗て批評家ヘルデル氏此の「ファウスト」を讀み、或る一節の解釋に苦しみ、遂にゴッテ氏が許に至りて之を質問せしに、氏も往時の起艸のとち

れバ、如何ある趣意にて書きしかを辨する能はず、遂に大笑とありしと云ふ。よく理解し得る者少き亦宜ある哉。

ゴエター
氏の死

氏は「フッスト」を著はせし翌年、年來苦しむ處の石淋病に依て死す。實に千八百三十二年三月二十三日あり。行年八十三。ソイマルの近郊に葬る。墓はシルレル氏と相隣れり。今日ソイマル府に遊ぶ者、文人騷客にわらざるも、争ふて之に謁し、二時伯が墓前、花尙嬋妍、香更に馥郁たり。

シルレル傳 (Schiller)

ヨハン、クリストーフ、フリードリヒ、シルレル氏は、千七百五十九年十一月十日ウエルツテンベルヒの一小市マルバッハに於て

生る。氏の曾祖父は由縁ある麵麩焼職を業とし、其父はヨハン、カスバル、シルレル(千七百九十六年十一月十七日生れ)とて外科術を學び、彼のエステルライヒの即位戦争に際し、イエェルン騎兵隊付の軍醫とありて出軍し、後マルバッハに來り住して外科醫を職とし、此處に於てレーウエンウァルトの娘コロドワイッス娘と結婚し、間もかくウエルツテンベルヒの軍隊に奉職して少尉とあり、遂に大尉に昇進してブリナーゾ離宮の林園管理とあり、又轉じて地方農學校長とされり。

シルレル
氏の幼年

氏は其母コロドワイッスが、未だマルバッハに滞在せる時に於て生れたるものにして、其母の緻密なる情感と、詩歌音楽に向て活動する資性は、軟弱ある嬰兒の腦裡に感染して再び

消失せず加之其父もフーベルツブルグの和睦後世上稍々平穩とありてより家族團樂の中に加はるを得しかば男子として欠く可らざる活潑忍耐の氣性も亦其父より感受するを得たり。

氏の就事

千七百六十五年に於て一家レムス河畔のロルヒ市に移轉するに當り氏は牧師モーゼンに就て古語を學び初めて學道の門に望めり而して氏が後日の著作 *Reibel* (群盜) は蓋し此モーゼンに就きて其材料を得しものありとぞ。

千七百六十八年氏は其両親并に姉クリストフイチ後ゴオタラインツルと共に父が校長となりし農學校の地ルッドウツグスブルヒ住居するとなりしが後此農學校に就てツリチ

氏神學に志す

テある一著を得たり此處に來りて氏は直に羅甸學校に入りて勉強し千七百七十二年に至り其嚆望する處に従ひ神學を學ばんが爲め先づ基督教の洗禮を受け、*シュウヰヒツ* 寺院學校に入學せり當時此校は大學に於て斯學を學ばんと欲するものゝ爲には尤も適當せる豫備門ありしなり而して今日に於ては尤早傳はらずと雖も氏が悲哀戯曲の一ある *Christen* (基督教信者) たるものは恐らくは此宗敎教育に感激されたる時代に於て成りしものあらん。

氏カール校に入學す

然るに偶々カールオイゲン公軍人の子弟を入校せしめて軍士を養成すると共に亦法學醫學を教授するの目的を以て軍律的の校則に依り茲にカール學校を設立し浴く少年才子

弟を慕り、亦氏の親父に向つても、其子を入學しめんことを請求するに會ひしには、余義なく其募集に應じ、千七百七十三年一月十七日遂にカル校に入て法學を修はるとぞされり。抑も此カル校の組織は、教育規定の整頓せる今日より見れば、甚だ不完全あるものにして、其中には非常に苛酷ある練習的の規律も行はれしものゝ如しと雖も、之れ獨り此校に止まらず、多少覺殿の別はあれ、當時獨逸一般の慣例にして、亦ザンセンの貴族學校の如きも、此校に異なる處あかりき。左れば其教授法も、強ち全備せりと云ふにはあらざれども、先づ當時に在りては良校と稱すべきものにして、文學の志氣も多少校内に存せしものゝ如く、ゴエターの著書は盛に此

カル校の組織

校に行はれ、殊に彼の「クラブ・ゴ」の如きは、嘗てカル公の誕辰に際し、生徒等之を祝戯として演せし程ありき。併し乍ら氏は神學を好むの念を割いて、余儀なく此校に移りしものあれば、當初より不平を制して入學し、日々法學の課程に就くと雖も、此無味なる學科に於ては、氏の多情ある文學志想を満足せしむる能はず、遂に或る二三の同志と計り、學校より遁走せんと迄思ひ定めたるともありき。

併るに千七百七十五年、校舎「スツッガルド」に移轉するに際し、氏は目的を變更して醫學に移り、以て漸く遁校の念を抑制したりしが、之れとて全く氏の精神を牽留するに足らず、其過半は文學の爲に奪はれたりき。然り而して此カル校は、後

日非常に進歩し、ヨゼフ帝より高等カル學校として、三分科を有する大學の列に加へられたり。

氏初めて
ゴエター
氏に會す

偶々「シラプゴ」の著者ゴエター、ニュウイツ旅行の途次、カル、オイゲン公に謁見せんか爲め此處に來れるに際して、氏も初めてゴエターと相會し、非常なる感化を受けたり。之れ實に文壇稀世の一對にして、ゴエターは氏より長すると十歳、文才詩想具備して芳名赫々、己に當時の文傑ありしも、氏は羽翼さへ整備せず、未だ巢窟の雛鳥あれば、其ゴエターに對する應接態装、甚だ笑ふべきものありしと雖も、己に一流の詩人としては、争ふべからざる資格を備へたるもの、如し。

氏カル、
オイゲン

氏のカル學校に在るや、萬事其心を卑屈に誘導するの媒助

公に愛さ
る

のみ多く、剩へ嘗て氏が自白して「余に恩恵を興ふるカル公は、両親よりも更に尊愛せざる可らず」と云へる如く、一時氏が敬愛の念は、全く公の爲に奔はれしかば、其両親を信愛するの孝心の半影だも存せざりしもの、如し。之れ全く公が氏を偏愛せるに基けるものにして、氏と同類ども云ふべき詩人「ニコバルト」を、ホッヘンアスペルグの獄舎に投して、一年間之を繋留せる如き、他に對しては殘逆無道のカル公も、氏に對しては無量の慈恵を下せしかば、從て一意公に寄依すると共に、一種の鄙情氏の心中に生し來れる、亦是非も無きと云ふべし。

千七百七十九年二月十一日カル公の誕生日に於て、氏は其

考案より、或る祝祭の遊戯を演し、大に公を喜のしめたりと云ふ。

氏の亦此處に於て、公の愛妾伯爵フランチスカ、フォン、ホーヘンハイム女と相知るを得、女に就て著しき婦女の理想を發見せり。

氏志を戯曲に傾く

當時氏が模範として敬慕せる人物の、シユールバルト及びクリンゲルにして、亦好んでクロップストックの「メツシアス」ゴエターの「ゲッツ」及び「ヴェルテル」、ゲルステンベルグの「ウゴリノ」、ライゼウキッツの「ユリユス、フォン、タレント」等を読み、且つウッパタラントの翻譯に依りて、シユキスビーヤの著作を味ひ、大に詩想を開發し、已に千七百六十六年に於て、「新年」の詩を作りしを初め

氏の第一著

とし、其後此等の誨詩續々腦中より湧出せし如く、今の詠史的一大詩を作出せんと、の念盛に、先づ勇士モセスを以て其材料とせしが、後思へらく、其胸中に綿々たる詩情を云ひ現はすに、自由にして尤も適當あるものは、寧ろ戯曲ドクトの組織に在り、と、以て自今斯道に心を傾けたり。

其他氏に少なからざる感化を與へたるものハ、ルーツーの著書にして、氏が作詩中ルーツーを稱揚せし語は、往々目に觸るゝ處なり。

氏の已に以前より「スツードンテン、フォン、ナッサウ」「コスムス、フォン、メヂナー」等の如きものを組立て、悲哀戯曲を作らんと欲せしも、遂に完結に至らざりしが、千七百七十六年則ち

氏が十八歳の時に於て彼のシェーバルトの一話を探り、初めて全備せる一戯を綴れり。之れ則ち有名なる Rauber (群盗)にして千七百八十年に至りて完結せしものなりとす。氏の両親の感化によりて幼時より熱心に基督教を信奉して、聖書を愛讀し、殊に詩篇及び豫言の類に、氏の尤も翫味せる處にして、其作出せる詩歌の如きも、多くの此精神に基けるものありしが、今や基督教に對する疑惑胸中に出没し、殊にホルタイレ(有名なる佛國の詩人、生、千七百七十八年五月三十一日、死、千七百九十四年十一月二十日)の著書を讀んでより、縦令其觀念の未だ全く其宗教を去らずとすも、再び教會に臨んで説教を聴かざりき。

氏初めて
社會に出

千七百八十年十二月十四日目出度くカル校を卒業して、直にスツツガルに在る近衛兵營の軍醫補に任命され、十八グルデンの月給を得て、初めて獨立の生活を味ふことありしが、此職務の氏に適當せるや否やの暫く措き、其事務甚だ繁激あらざりしかば、傍ら其好める文學に従事するを得たり。

初めて著
作を公に

扱氏の今日に至る迄、嚴格ある校則に束縛され、万事壓制の下に在りし身の、今や突然自由ある世路の潮流に游泳するところあり、其反動より氏の行狀に著しき變更を來たし、些細の俸給に其消費を充たす能はず、從て借財も亦嵩みしかば、彼の Rauber (盜賊)を出版して其を補はんとせしも、氏の名

聲未だ現われざるの當時に在りて、之れが金主とあるもの無く、止を得ず尙借財を重ね、遂に千七百八十一年の夏、自費を以て之を上梓し、其表紙に「艸花を飾捺して、盜賊カル、モールを現はし、塔内より引出せる父の目前にて、復讐を誓ふの圖を書けり。」

氏海に
マンハイム
に赴く

此著の世に出るや、豫想外の好評にて、フリードリヒ、シムルル、の名の一時世上に驚しく、マンハイムの俳優監督ヘリベルト、フォン、メルベルヒの氏に乞ふて之を舞臺に適當する様補刪折衷し、マンハイムの劇場に於て演ずるとなれり。氏の其自作の演劇を見んと欲し、休暇の許されざらんとを恐れ、軍隊に無届にて、千七百八十二年マンハイムに來れり。

一月の初舞臺にて、有名なるイッブランド、フランツ、丈モオルに扮して非常の喝採を得、後至る處此曲を演せざるを「ロイメル」の曲を知らざるの人無きに至りしが、獨り古郷スツツガルドに於ては、甚た面白からざる批評行はれたり。

氏カル公
の不興を
蒙る

併し乍ら氏が無届の逃走は幸に露顯せず、オイゲン公は矢張氏を目するに、カル學校以來の一才子を以てし、之れを優待せしと雖ども、氏の「ロイメル」に對しても、亦同時に出版せし Anthologie fur d. I. 1782 (千七百八十二年の歌集)と題する著作に對しても甚だ冷淡ありしが、之れ畢竟其趣向の華美艶麗からざるより、槐門金殿の内に生長せる公の目には、其妙所を見出す能はざりしのみならず、書中徃々公を諷す

シムルル傳

るが如きの点無きにしもあらざりしかば、反て機嫌を損したるものゝ如し。左れど公は先づ氏を召し、慈父の懇切を以て、目の當り著作事業の誤れることを戒め、且つ自今其事業を一々公に示さんことを求めたりしに、氏は斷然之れに反對して其請求を拒絶せり。於是公は大に怒り、偶々氏が「フケヌ」なる新戯曲を艸せんとするを聞くや、非常なる酷命を下して、以來醫學外の著作を爲し、又他國に往來することを禁したり。氏は元より能く公の氣質を知るを以て、若し之を犯さば用捨なく刑罰され、彼の「シニールト」と轍を同うすべきを知りつゝ、再びマンハイムに秘密旅行を企て、遂に十四日間の禁錮に處せられたり。

氏マンハイムに出奔す

斯の如く氏は公の命令に因りて、將來の愉快ある希望を障害され、今は失望落膽の淵に沈みしが、如何にもして其身体及び精神の束縛を脱し、以て其欲する事業に従事せんと決心し、更に一層の勇を鼓して、「フケヌ」を綴り、遂に千七百八十二年九月十七日親友音楽家アンドレア、ストライヘルに従ひ、スツツガルドを出奔して、マンハイムに走れり。之を知る者は其母及び姉等二三の親友のみにて、父は却て知らざりき。

一著出て、高評を博すれば、他の卑劣小説家之に摸倣して名利を貪るは、今古東西皆等しく、彼の「ゴエター」の「ゲツ」出るや、其當時は騎士の小説流行せしが、今又氏の「ロイヘル」出るや、

盜賊小説盛に行はれたり。

且つ彼の歌集も非常の評判なりしかば、氏は益々自己の文才を信用するの念を確め、新作「フ・エスコ」も亦た充分の好評を得べしと豫想して、マンハイムに來りしに、其信任せるヨルベルヒは氏を遇する非常に冷淡にして、「フ・エスコ」出版の金主たらんとを乞へども、其用ゆべからざるを斷言して之を拒絶し、其他一切氏の著作を輕蔑して採用せざるのみならず、借金を申込みしも之を承諾せざる等、氏をして其希望を全く齟齬に歸せしめ、甚しき困難の地位に陥れて「困苦か余の尊大を不具にす」と絶叫せしむるに至らしめたり。左れば氏は長く此處に止まるとの得策にあらざるを察し、

氏ハワエ
ルバツハ
に退隱す

ウオルツオゲン婦人に乞ふて、マイコンゲンの一小村バウエルバツハに在る其所有の邸宅を借りて、暫く退隱せんと欲し、漸く一著を書肆「ユワン」に任せて僅の金子を得、それにて旅店の消費を償ひ、マイコンゲンに赴けり。此婦人は嘗てスツツガルドに於て知己とありし人にして、亦其息子ともカル校に在りての同窓なれば、其間に淺からざる交はりありしものゝ如し。

千七百八十二年十二月七日に於て、漸くバウエルバツハに到着したりしが、破衣弊帽實に不憫ある有様にて、亦自らも難船に會ひ濤波に弄ばれて、九死の中に一生を得たる水夫も、斯くこはと思ひし程ありき。併し乍ら此山水の風色に富

める閑地に於て、靜に心氣を養ひしかば、間も亦く其疲勞も恢復するを得、後ウオルツオケン婦人其娘と共に來り住するに及び、婦人は非常に氏を優待し、勉めて其愛戀を慰め、殊に其娘の十六才に於れるロツタル嬢との艶麗ある交際の、益々氏の精神を奮興せしめたり。亦マイコンゲンの圖書館長ラインワルドも氏を信愛して、其圖書館の書籍を貸與し、或は氏を訪問して、只管親密の交際を結びしが、之れ則ち氏が將來の姉婿とありし人あり。此等の人々と相往來するの外、氏の一室に閑居して専ら著作事業に従事し、茲に「ルイゼ・ミルレリン」を終へ、直に他の著作を綴り初めたり。之れ則ち「ド・ンカルロス」にて、其材料は蓋しラインワルドより得たるも

あり。

氏又マン
ハイムに
出づ

斯くてタルベルヒは、氏がパウエルバッハに在りて熱心に著作事業に従事すると聞くや、前に氏を冷遇せしにも係り、らず、心悪くも亦氏にマンハイムの劇場付作者たらんとを乞へり。氏は其處置の反覆常きを面白からず思ひざるに、わらず、且つロツタル嬢を戀愛するの情燃るか如き當時に在りては、娘と相離るゝも亦忍びざるの思ひありしと雖も、果し無く他人に寄寓すると更に必苦しく、遂に多少の不滿を忍び、此親切ある一家の團樂を割きて、千七百八十三年七月の末マンハイムに來れり。爾來氏の著作の總て舞臺に上せられ、其謝禮として年三百グルテンを得るの約を結び、直

に新著述に着手せり。翌年一月十日に於て彼の共和政治の
悲曲ある Die Verschwörung des Fiesco zu Genua (フィエスコに於
けるフキエスコの謀反)は舞臺に演せられ彼の Kabale und Lie-
be (詭計と戀愛)も亦間もなく演せられたり。

氏の
時代

氏に此マンハイムマンハイムの演劇作者たる間に種々ある人物と交
際を結ひたりしが其中にカールロッタ、フォン、カルプと名
付けたる一女ありき。其性質非常に感情深く、多少學才もあ
りしかど頗る偏したる氣質にして、已に他に嫁せしも其夫と
意氣合せず、充分夫婦の交情を盡す能はざりしが。偶々 *Kaba-
le Liebe* (詭計と戀愛)の演劇あるに際して、千七百八十四年
五月八日マンハイムマンハイムに來り、氏と交際すに及て、女が常に理

想せる男子の資格を、氏に於て見出すを得てしかば、種々の
妨害あるにも係わらず、熱心氏を戀愛して胸を焦すに至れ
り。併るに當時氏の己が出版物の金主の娘マルガレタ、シユ
ロン嬢と親密なる交情に在りて、氏が意中の人の全く此嬢
なりしかば、カルプ女が滿腔の熱情を注ぐも、氏の更に流水
の意あかりしが如し。ざりながらカルプ女も今の芳紀二十
三歳にして、摘花露瀉らんとするの艶姿、如何で男子の愛を
率かざるの理わらん。左れば氏も全く女を顧みざるにあら
ず、時々相提携して交情を温め、遂に氏が詩想上に女の勢
力を及ぼすに至れり。之れ實に氏の艶福時代にして、左右の
櫻桃各々嬌を競ひ、氏の歡心を買ひんと欲するもの、如く、

氏大に著
起す

氏自らも亦之を以て大に得色ありしが如く彼の「ドン、カルロス」に於て、此二女が戀愛の競争を描出せる痕跡を見る。斯く氏は、一方に於ての兩女と交際して、樂しき境遇に在りしにも係りらず、一方に於ての、ダルベルヒ及び役者仲間との交際を厭飽するに至れり。之れ蓋し此仲間、氏が高尙せる理想と匹敵して、共に談ずべき人物なく、長く此社會に在りての、實に自己の理想をして、愈々高尙遠邁せらしむる能はざるのみならず、遂に己に養ひ得たる詩想までも併せ失はんことを恐れられたれり。且つ氏の今日迄只ダルベルヒにのみ依頼して、事を爲せしとの卑屈なりしを悟り、以來單に自己の學才を恃み、獨立獨歩廣く天下に雄飛せんとの望

乃ち獨逸人固有の自恃心を發揚したれば、早く此仲間を脱せんと企て、更に「ドン、カルロス」を綴續し、亦「ライコツセ、タリア」ある演劇雜誌を發刊し、其第一號に於て、氏は如何あるものが演劇の本色あるやと云へる問題を掲げ、劇場の徳育上の場所にして、總て演劇の宗教及び法律を補足するの意思にて演せられざる可らざるを論したり。之れ元より一方に偏したる論にして、完全ある説との云ひ難かるべく、氏自らも亦後日に至りて、此主論を維持する事能はざりしが、兎に角氏が當時の心情の、全く此点に在りしが如し。千七百八十四年、氏の其親屬を訪ひんが爲め「ワイマル」に至りしが、ワイマル侯カル、アウグストの召す處となり、ダルム

マクツトの宮殿に於て彼の「ドン・カルロス」を講演するの命を受けしのみならず、氏の「ゴエテ」の友人ある處より大に信用され、後宮中顧問官の職位を得るに至れり。

氏ザクセ
ンに招待
さる

左ききだに氏の已にマンハイムの演劇作者の位置を嫌惡せる折から、斯くワイマル侯より優待され、且つ又十二月に當りて、氏を尊重愛顧せる、當時ライプチヒの大審院判事クリストーフ・ゴットフリード・ケルナル（千七百五十六年ライプチヒに生れ、千八百三十一年ベルリンに死す、ドレスタンの詩人テオドール、ケルナルの父あり）を首として、其下に一團休を作れる人々より、四の畫像を畫き、美麗に裝飾せる書狀を贈りて、懇切丁寧に、氏に一度ザクセンに來り遊んことを勧めたりしか、氏の喜悅措く能はず、斷然マンハイムの職を捨て、直に感謝の

ケルナル
との交際

書狀を送り、承諾の旨を答へたり、之れ氏が心を奮起せしめしと非常にして、又實際氏を樂しき友情の交際に導きたり。翌年四月ライプチヒに來りしが、當時ケルナルのドレスデンに職を奉して不在なりしか、其未來の妹婿とされるフェルデナンド・フェメル氏を歡待して親しく交われり、其後間もかくケルナルとも相知るを得しが、ケルナルの時々に氏の著作を見て、適切ある批評を下し、氏をして大に悟る處わらしめしのみならず、言語上行爲上心の限り親切を盡し、氏を無二の親友として優待せり。

其他此小團樂の内には、技術家の娘にして後ケルナルの妻となりしミンナー、ストーン嬢あり、氏に贈りし狀筒の裝飾の

ケルナル傳

此嬢の手に成りしと云ふ、又其妹にドラ嬢ありて、繪畫に長し、此團樂の人々の肖像を畫き、亦シルレル氏の肖像も嬢の手にありしものあり、氏の此等の佳人才子と日々相會して、實に樂しき時日を経過せり。

千七百八十五年九月迄、万事ケルチルの保護を受け、ライプツヒの近在ゴーリスの一家に住して、一意熱心、ドン、カルロスと續綴するの余暇、彼の一團の人々と相往來して、心中些細の憂愁なく、いと面白く生活せり。其家屋の今尙存在して、氏を敬慕するもの、從覽するを得べし。此處にて *Lied an die Freude* (喜の歌)の作ありしが、只語格に拘泥したるが爲め、其眞意を述ふるに疎なりしが如く、甚だしく賞すべきも

のにのあらず、氏も後日に至り其拙作ありしとを自白せり。氏の前にはマンハイムに於て交情甚だ密なりし彼のマルガレテ、シュワン嬢と合婚の約を結いんと欲し、父の許容を得て其旨を云ひ送りしに、嬢の母之を承諾せず、嬢に一言の相談もなく、嬢の性質氏の性質と相合はずと稱して、拒絶の書状を送りしかば、遂に惠蘭の茂るを見る能はざりし惜むべきとなり。

氏ドレスデンに遷る

ケルチルがミンナー、ストック嬢と結婚するに當り、氏もドレスデンに至るとあり、九月十一日の夜半特別郵便と共に、エルベ橋を越へてドレスデンに到着せり。爾來ロッシュウッツの近傍に在る、ケルチル所有の葡萄山の上に住居を定め、此處

に全二年間殆んど隠遁の姿にて静なる閑日を消過せり、其間熱心に著作するにあらざれば、只ケルチルと相提携談話するのみありしが、ケルチルの嚴肅なる氣質、忍耐不屈の精神、速に氏の上に感化を及ぼし、彼の「フォルマル」(千八百一十一年八月二十一日生、千八百六十八年七月三十日死せし)が云へる如く、氏が従來の不羈定りなき、頗る偏頗なる生活を變じて全く正反對に、規矩準繩の度に移し、其性質に著しき變化を興へたり。

此處に於て従來續綴し來れる彼の「ドン、カルロス」を完結し又「レッシング」の例に習ひ、無韻句法を用ひて「ナターノン」を作れり。千七百八十七年六月付を以て完結せる「ドン、カルロス」を「ムブルヒのシレーダル」に送りしに、八月三十一日初めて其

處の舞臺に於て演せられたり、此曲の氏が四年間の經歷に於て種々の變遷に遭遇したる後に出來たるものかれの以前の若シ「レルレル」氏の五大戯曲とい、大に其趣を異にせるを見る。

氏ワイマ
ルに赴く

千七百八十七年七月、氏の此處にて知己とありし女友「エリカベス、フォン、アルコム」嬢の執拗なる請求に従ひ、生計の道を求めんが爲め、「ワイマル」に至るととなりしが、益友「ケルチル」と別るゝに當りて、實に忍ひざるの悲しみを以て訣を分かち、且つ氏が「カル、アウクスト」侯の下に至れば、直に好位置を得んと思ひしに、遂に無益の事とありき。

ワイラン 七月二十一日「ワイマル」の首都に到着せしに、不幸にも當時

侯のフロイセンの陣屋に滞在中にて、知人ゴエターも未だ伊
太利より歸り來らざるのみならず、常に氏の著作を愛讀す
る女侯さへ不在ありしかば、氏の實に失望せしも、幸にウァー
ランド、ヘルデルの二氏此處に在りて、除々交際の緒を開き、
當時ウァーランドが發刊しつゝありし *Merkur* 雜誌に助力し
居たりしが、又此處に彼のマンハイムに於て知己となりし
フオン、カルプ女ありて、尙氏を思ふて止まず、女侯アマリヤも
爲に媒介の勞を取らんとするものゝ如くありき。女の以前
の結婚に於て、非常に不幸を感じたるものにして、蓋し氏と
階老の約を結んんが爲め、之と離縁したるものなり。併るに
後氏の女を携へてエナに起き、暫時共に在りて、熟々女の性

質を見るに、之れを結婚して決して愉快ある境遇を興ふべ
き婦人にあらざることを悟りしかば、遂に女を見捨つるに至
れり。後女の其妹婿の爲に財産を奪われ、非常に困難の地位
に陥り、千八百二十年遂に盲目となりしを、プロイセン皇女
アリアンテ之を憫み、ベルリン城内に引取りて保護を與へ
たりしが、千八百四十三年五月十二日八十二歳にて此所に
死せりと云ふ。

氏が此不幸なる女友と關係を絶ちしに、恐らくの寡婦レン
ゲフェルドの娘カカロッテ嬢との戀愛と、其姉カロリ子嬢と
の友情に基けるものからん。抑も此三女との已にマンハイ
ムに於て近昵せるものにして、氏の十二月マイニンゲンに

赴き、氏を愛顧せる老女友ウァルツァゲンを訪ひ、同窓の學友ありし其息子と共に、ルードルフ・スタットに騎行し、レンゲフェルトの家に投して、茲に其舊情を温め、樂しき家旅の中に立交りて、實に云ふ可らざる愉快を感じ、遂に、此所を去るの忍び難きものあるに至れり。

千七百八十八年の春に於て、此姉妹あと手狀を往復する程の交情となり、五月よりルードルフに程近きツァルクスタット村に居を定め、或はルードルフに至り、或は此所に歸りて、自由に生活し、其間熱心に *Geschichte des Abfalls der Vereinigten Niederlande* (共和國 ニダラランドの滅亡史)を綴り、亦 *Der Geisteserker* (精神觀察者)なる小説を作り、次て *Gaetter Griechen-*

nlands (希臘の諸神)ある詩を作りて、彼のウァーランドの *Merthur* 紙上に於て公にせり。之れ則ちメンテールが評せし如く、憂鬱 アンノイゼン ありし美詩にして、旺盛なりし希臘宗教の衰退を嘆せしものなり。

當時氏の全く古物界に生活せしもの、如く、其著す所のもの、多分の古昔の事跡にてありき、カルロッテ嬢の望に従ひ *Iphigenie in Aulis* (アウリスに於けるイフィゲニー)及び *Phoenicirinnen* (フェニキアの女)を翻譯し、又當時の觀察より *Kuenstler* (藝術家)ある教誨詩を作れり。之れ氏が自白せる如く、全く當時の境遇の内部を描出せるものなり、

斯く氏のルードルフに於て面白く日月を經過せし内に、ゴッテ

一も伊太利よりワイマルに歸り來りしが、氏の彼の Egmont
 を批評してゴエターに贈り、以て文事上交際の端緒とさん
 とせしも、ゴエターの其の批評を讀む前に於て、彼のレンゲフェ
 ルドの姉妹より招かれてルドルフスタットに來り、姉妹等の
 紹介にて互に語を交ゆるに至れり。氏のゴエターの容貌及び平
 日の状態を見て、友人ケルチルに書を送りて曰く「余はゴエテ
 ーと此後非常に親密にあり得るや否やを疑ふあり。彼の余
 か今利益し亦今より得んと欲する處の、己に盡く経過し來り
 し者にして、年齢の差よりの其經驗進歩の差甚しく、逆ても
 逐付駢馳するに能はざるべし。且つ其性質の當初より余と
 異にして、其著作も亦全く異なれり」と。蓋し是の氏自らのみ

ならず、一般世人も亦等しく認むる處にして、氏の理想家を
 以て起り、ゴエターの寫實派を以て立ち、両雄文壇上に匹敵せ
 し以所あり。

シルレル
 氏大學講
 師とある

併るに氏の間も亦かく此處を去るの時期來りしに、彼のレン
 ゲフェルド姉妹との交情の愈々濃にして、何れを何れと定め
 難く、其撰擇に苦しみしが、妹カルロッテ嬢カロリチ嬢に優る
 處やありけん、遂に後日氏の夫人となりしもの、此嬢あり
 き。カルロッテ嬢の女友にスタイン女ある者ありて、氏の爲に
 或る定職を供せんと企てしが、彼の *Niederland* の著作の大
 に氏の學才を確め、偶々エナ大學に一人の教授を要する折
 ありしかば、之れ尤も適當ある位置あらんとて、スタイン女

の非常に奔走盡力し、ゴターも亦千七百八十八年十二月八日のカルアウクスト侯の議會に一書を呈して、氏を推舉せしかば、遂に翌年三月無給大學教授に任命されたり。此時氏の兩親を始めルードルフスタットの女友等、之を聞て非常に満足祝賀せりと云ふ。

併し乍ら氏の余り之を喜んざりしものゝ如く、彼のケルナルに送りし書に「世人の余を見過れり、余の心或は是に在るも、尙二年間の準備の爲に費さんと思ひ居たりしあり。此新位置を考ふるに、余の可笑しく感ずるあり。多數の學生の恐らくの教授君より多くの歴史を識るるべし。ゴターハ教授に依りて學ぶと雖も、之れ余の學識の如何に僅少あるか

を知らざるなり」と、之れ或は謙遜せる語あるべしと雖も、亦以て氏が當時の心中を知るに庶幾からんか。

五月二十六日氏は初めて大學に於て、*Was heiszt und zu welchem Ende studirt man universal Geschichte* (萬國史を學ぶ目的如何と云へる題を掲げて就職演説を爲せしが、聽衆殆んど五百人にて、實に盛大あるとありき。然るに其後氏が羅馬史の講演を開くに當りてハ、聽者僅々三十人内外に過ぎずして、其中月謝を出す者は十人に充たざりしと雖も、氏の性質として、萬事只腦裡に記憶し置くことを危ふみければ、日々の講演も亦材料を蒐集して、一々稿書し置く其苦勞の實に甚しきに、其聽衆の斯く僅少あるを見て不平に堪へず、稍々大學

教授の職務を嫌惡し來れり。

只氏の心を快然たらしめたるもの、此年の暑中休暇に當り、ラウヒステートに於て、レンゲフルドの姉妹と共に生活せしとにして、茲にカルロテ嬢遂に氏の夫人と定まりしが、稍々氏の不平均ある位置を補はんが爲め、マイニンゲン侯に宮中顧問の官位を得んとを願ひしに、之を許容されしのみならず、侯は此結婚を祝して、年々二百ターレルを下賜するとおされり。

氏の結婚

千七百九十二年二月二十二日、エナ府ウエニンゲン村の寺院に於て、氏のカルロテ嬢と目出度結婚の式を挙げたり。之れ實に好對の篤篤にして、嬢は其後四子を挙げ、氏の死後尙

二十一年間生活して、千八百二十六年六十歳に達し、ボンに於て死せりと云ふ。

此一新したる愉快の境遇に於て、氏は喜悅と快樂を以て仕事し、大學の講演と共に *Geschichte des 30 jaehrigen Krieges* (三十年戦争史)を綴りて、其前半をケッシメンが *historische Kalender für Damen* (貴女に向つて史曆紙上に公にし、亦大學に於ても三箇の講演を擔當するとあり、稍々驍足を伸べずに至れり、併し乍ら此烈しき勉強は、直に氏の健康に影響して、歳末に至りエルフルトに至りし時、甚しきカタル熱に襲はれ、翌年一月、エナに歸りて病勢益々加はり、遂に肺病と變じ、其か爲め氏の生命の幾分を萎縮するに至れり。

カルスバードの温泉に至り療養するとありて、其病勢の大
に薄らぎしと雖も、此等の事變より多額の費用を要し、今や
愈々困窮の位置とありしが、大學講演より、矢張些少の報
酬に過ぎず、左ればとて文學事業に依りても、以前一身を之
れに供せし時の如き収入あらず、親友ケルチルに對しては
當時尙負債ありしかば、重ねて彼に訴ふべくもあらず、カ
ルアウグスより給與さるゝ頼にては、到底氏の消費を充たす
に足らずして、實に困却せる折から思はずも、昨年エナに於
て知人となりしデンマルクの詩人ハッゲセンの盡力にて、ア
ウグステンブルグ侯デンマルクの宰相シュメルマン伯と
共同して、三年間年々千マルクの療養金を惠與するとと

あり、漸く困弊を恢復するを得たり。

斯くの如く氏の稍々氣樂ある境遇とありて、カントの哲學
を研究し、傍ら彼の 30 jährige Krieg (三十年戦争史) 讀綴して
十一月に完結し、又 Wallenstein (人名) 等の作を趣向しつゝ、あ
りしが、之れ蓋しハイメンの温泉旅行に於て、新に材料を得
しものなりとす。

氏の彼の哲學を研究するに當りてや、常に道徳美術の点に
向て眼を注ぎしが、其結果として數多の勸善教誨的文章
を卿し愛顧者アウグステンブルヒ侯に捧呈せり。

千七百九十二年の秋、氏の其母及び妹を訪問し、翌年八月久
しく希望し居たりし古郷シュワールメン旅行を爲し、千七百九

古郷に
歸る

十四年五月中旬迄此所に止まれり。其間初めのハイルブロンに住し、後ルードウィグスブルクに至り、遂にスツツガルドに移れり。氏は此度彼のカル、オイゲン公に一書を呈して、過去の無禮を謝せしに、其答書の無りしと雖も、公か昔日の怒も尤早解けたりと聞き、大に心を安したり。然るに公の千七百九十三年十月二十四日に於て卒去せしかば、遂に再び相見ると能はざりき。

ゴエテ
と相結
す

古郷シュリーベンに滞在せる時、氏の夫人初めて一子を分娩せしか、其喜悅は云ふ迄もあく、老父シャルレルも七十歳の高齡に達して尙壯健ありしかば、家族團樂の快樂は一層の光輝を放てり。加之新舊の友人と相往來し、舊を語り新を談し

て、安樂ある日月を經過し、又た書肆コックと相知りして、管に友誼上の交際に止まらず、相計りて文學上の一事業を起すに至れり。則ち「ホルレン」と題する雑誌を發刊して、恰ねく有名なる著述家を結合せんとて、殊に「ゴエテ」に協賛を求めしに、喜んで之を承諾したりしかば、氏は五月エナに至りて、此新事業に着手することあり、ゴエテも亦直に來り會して共に盡力せり。之れ兩雄相結托せるの初めにして、以來交情益々密にして水魚の如く、兩輪相援けて遂に再び離れざりき。其間に氏は又千七百九十六年の Musen Almanach 紙上に、Die Macht des Gesangs (歌の勢力) Fanz (踏舞) Ideale (理想) Wine (酒) Die der Frauen (婦人の位)等の詩を公にせり、亦 Nunien あり

スホツトクダヒト
 謡詩も此頃の作あり。

其後は専ら志を戯曲に傾け、Rittern v. Malta (マルタの騎者) を綴り、亦 Wallenstein (人名) の組織を考案しつゝありしが、偶々最愛の妹死去し、又間もなく老父の逝去に會ひ、甚しく悲嘆に沈みて筆を採るの英氣なく、僅にゴエターとの交際に依りて、其鬱情を懣め居たり。

千七百九十七年は両氏の作詩時代とも云ふべく、氏はエナに於てサルの谷を一目に見下ろし、尤も風景に富み、且つ涼亭もどわりて、夏時の寓居に適當する一邸を求め、五月二日之に移り住してより、Faucher (潜水者) Handschuh (手袋) Ring des Polykrates (ポリシラタスの指輪) 等數多の作詩あり、ゴエナ

ワルレン
 ゴエター
 両氏の作
 詩時代の

にも亦 Zauberlehrling (魔法使の弟子) Braut v. Kolinth (ニン
 ト嬢の嫁) 等數種の作詩ありしが、此等の詩は總て翌年の
 usenalmnach 紙上に現はれたるものあり。

其翌年に於ても亦 Kampf mit der Drachen (龍との戦) Buer-
 schaft (人質) 等の詩出でたり、彼の有名なる Das Lied von der
 Glocke (鐘の歌) も、此作詩時代に於て出来たるものあり。

千七百九十八年の初に當りて「ホーレン」雜誌の繁雜ある負擔
 を脱れて、専心 Wallenstein (人名) を綴作し、十月に Wallensteins
 Lager (ワルレンスタインの陣屋) の篇を終り、十二月に於て
 ワイマルの舞臺に上せ、翌年一月三十日女侯の誕生日に際
 して、Piccolomini (人名) の篇演せられ、四月十一日 Wallensteins

『Tod (ワルレンスタインの死)の篇演せられ、茲に全く『Henslein』の局を結びしが、毎篇皆非常の好評にて、後七月フ
リードリヒ、ウァルヘルム三世及び女皇ルイゼの天賢を恭
ふしたり。

千七百九十九年の末、ワイマルに移轉するところありて、侯よ
り二百ターレル増給され、又 Musenalmagazin 雑紙の主任を脱
れしかば、一意戯曲の著作に従事するを得て、悲劇 Maria
Stuart (人名)を帥し、翌年六月九日之を完結して、十四日舞臺
に上するところありしが、有名あるカローリチ、ヤゲマン女エリ
サベスに扮して、中々の好評ありき。又 アウグスト 侯より勸
誘されて、Maria Stuart を綴る傍ら、英國の戯曲を研究し、せ

クスヒーヤの Macbeth を翻譯せしが、此は千八百五年五月十四
日 ワイマル に於て演せられたり。次て小説的悲曲 Jungerfrau
v. Orleans (少女オルレアンヌ)を作り、翌年四月十六日に完結
せり。

其後親友ケルナルと舊情を温めんが爲め、トレステンに旅
行し、間も早く歸り來りて一家を新築するところあり、種々の
俗務に逐はれ、千八百〇二年の夏迄著作事業を探ると能は
ざりき。四月三十日新宅に移住するに當りて、老母長逝し、爰
に氏の英氣を挫きしと少あからず。遂に喘息病を引起し、甚
しく苦しみが、稍々快氣に赴きてより、希臘の悲曲家 エ
ー
ールの著を讀み、其れより誘導されて Brant v. Messina を綴

れり。

貴族に
捧げらる

ゴッテーも此間に於て二三の戯曲を作りしかど、戯曲の氏の尤も長する處にして、之に比すればゴッテーの作も余り好評あらず、従て氏の名聲獨り益々盛にして、一人のシルレルホル名を知らざる者無きに至り、遂に千八百〇二年アウグスト侯の推舉に依り、皇帝より貴族に列せられ、美麗なる章表を下賜されたり。於是乎氏の名望愈々高く、翌年身体療養の爲め、ロサヒステットに旅行せし時の如き、ウエルツテンベルヒの皇子オイゲン自ら案内者の勞を取りて優待し、又ワイマルに歸りし後、スウエデン國王に謁見の榮を給はり、加之彼の三十年戦争史の作を嘉みして、金銀寶石を鏤めたる美麗なる指

輪を恵まれたり、亦彼の以前の愛顧者マルベルヒも金員美酒を贈りて、氏の光榮を祝したりと云ふ。

斯く氏の名勢赫々雲上の位置を得るに及びて、益々精神を勵まし、*Brant*を終りし後、佛國戯曲 *Neffe als Onkel* (叔父としての甥等の一二を譯せしに、甚だ世人の好嗜に投して評判好かりしと云ふ、其他氏の新作の *Siegerfest* (勝利の祝祭) *Grafen von Halsburg* (ハッスブルヒの諸侯等二三の詩歌に過ぎずして、新戯曲の著の暫時中絶の姿ありしが、遂に彼の有名ある傑作 *Wilhelm Tell* (人名の著を見るに至れり、之れ蓋しゴッテーより材料を譲受けたるものにして、千八百〇四年二月十八日に完結し、三月十七日ワイマルの劇場に於て演

せられしが、非常の好評を博し、七月又ベルリンに於て演せられたり。

氏の名譽

四月下旬氏はイッランドより招待され、夫人と共にベルリンに至りしが、此際氏が著作せる戯曲の舞臺に登るを見んとて、劇場の棧敷に入り来るや、集れる観客一同大呼して萬歳を唱へ、大に氏の名譽を稱揚したりと云ふ、以て氏が如何に人民に迄尊愛されしかを知るべきあり、五月十三日女王ルイゼに謁見の榮を給ひりしのみならず、王の長くベルリンに止まらんとを勧めしかば、氏も慈恩の難有に感泣したりと雖も、舊友知人殊にゴエターと別れて、獨り此處に客たるとの物憂く遂に辞して又ワイマルに歸れり。

ベルリンより歸りて後、魯國の歴史より案出して、Demetrius (人名)の曲を綴らんとせしが、七月より重き風邪に襲はれて筆を採ると能はず、十月に至り稍々快氣に赴きし折から、翌月皇太子の妃ワイマルに來るにつき、人民各勸迎の意を盡すと共に、亦祝賀の演劇を爲すとありしが、ゴエターの當時エナ文學新聞の事務繁忙にして、他に筆を採ると能はざるを以て、遂に氏擔當せざる可らざることあり、非常に速急を要せしかば、病後をも顧みず、僅々四日間^中に於て、巧妙あるHuldigung der Kunst (技術の恩澤)と題する戯曲を作り、十一月十二日に於て演せられしに、皇妃の之を見て非常に喜悅したりと云ふ。

併し乍ら此病後の激烈なる勉強の氏の身体をして非常に疲勞せしめ、直に性悪るきカタル病に悩まされしが、折しも嚴寒の候なれば、病勢容易に去らずして、精神を凝らし志想を鍊りて、新作を組織すると能はざりしと雖も、佛國ラヂヤの作 Phædra (人名) を翻譯して、僅に二十六日間にて終り、千八百〇五年女侯の誕生日(卅一日)に於て演せられしが、アウクスト侯の之を見て大に満足せりと云ふ。

次て氏は再び彼の Demetrius を脚せしも、遂に完結する能はずして、又病魔の襲ふ處とされり。當時ゴエラーも病痾に苦しめられ居たりしかば、氏の稍々快よき折ゴエラーの病床を見舞ひ、未だ一言も發せずして、兩氏の相抱いて接吻し、後漸く口

を開き、氏の二月頃には尙二三の翻譯を成就すべしかと語りて、病者を慰勵し歸りしが、圖らざりき之れ氏がゴエラーを訪ひし最後とあらんとす。

島の最後

三月の初めより、又熱心に彼の Demetrius を綴り、虚弱なる身体をも顧みず四月の末迄繼續せしが、二十九日劇場に至りて歸宅せしより心地例ならず、遂に五月一日カタル熱とありて就床するに至れり。病中に在りても氏は尙筆を捨てず、Demetrius を綴りしが、第二篇デメトリウスの母寺院に在りて苦勞し、其息子に對する獨語の條迄認め、机に憑りたるまゝ、筆を投して又起たず。實に千八百〇五年五月九日、四十六歳を、一夢として天上の仙とされり。ゴエラーは當時未だ病床に

在りしが此計音に接するや悲嘆措く能はず或人に語りて曰く「吾こそ己に危しと思ひしに、圖らざりき今朋友を先立てんとは其か爲め余は餘生の半を失へるの感あり」と。

八月十日に於てシルレル氏の吊祭を執行し、氏の著作の「鐘歌」を戯曲として演せられたりしが其時ゴエター氏は「演劇の後」に一詩を賦し、以て氏を哀悼追慕せりと云ふ。

六大家傳畢

明治廿六年三月廿一日印刷出版

正價金拾錢

編輯者 大橋新太郎

日本橋區本町三丁目八番地

印刷者 宮本敦

神田區小川町登壇地



東京日本橋區本町三丁目

發兌書林 博文館

部矢五洲先生著

ウエルリントン

全一冊洋装
正價金拾錢
郵便税四錢

歐洲の山川を震動したるナポレオンがナポルトが滔天の武力を一舉に挫きたる英國古今無双の
其將として貴族院内多數の議員を擢用し一舉一動英國政府許多の内閣員をして喜憂せしめたる
大政治家としてウエルリントン公ウエスレーの名を記せざるものは五洲廣しき雖又一人もあ
るべし此書は矢部五洲氏が絢爛の筆を以て此偉人の傳記を叙列したるものにして其容貌動作言
論叱咤の狀勢歸して其實況を語るが如し特にウオルトルローの快戦の如きは叙し得て痛快淋
漓たり苟も公が一代の大業を知らんを欲するもの、必説すべし好傳記あり快文字あり

矢部五洲先生著

徳川家康

全一冊和装
正價金拾二錢
郵便税四錢

英雄を論ずる誠に難し本書は日本歴史の大立物たる徳川家康を捉へ來りて筆端湧き龍騰く寛
容海量の同情包潤變化の境遇等凡て社會に起れる事實の掛拾と深到深射の眼光を以て之を評論
す本書は是英雄解剖論美文の粹議論の快讀者は直ちに其深宮に至らむ

原抱一庵主人著

拿破崙

全一冊洋装
正價拾五錢
郵便税四錢

評世の巨人は譬は彼の雷霆の如く其名聲は轟々然として世界に響くも其眞形體に至ては漠焉とし
て捕捉し易からず從來那翁を論ずるの書乏しからずと雖も多くは曖昧の裡に描叙し了りて其眞相
眞面目は本書の「所謂未だ覆面裡に蔽はれあるなり」此米の文傑ヘツドレー氏公直の見平靜の識を
以て縱横無盡に那翁を描叙品靡す列國の形勢那翁の戰畧軍法兵制其品行其德性其伎倆其智能其幼
時其死期叙し去り叙し來り評し去り評し來り筆端生し地上雲起る其所論正直實實故に人の心に感
する深くして切其描叙や明にして快故に偉人眼下に顯はれ來る抱一庵主人今之を譯して世人に紹
介す主人が玲瓏の心胸透徹の彩筆世既に公評あり庶幾くはナポレオンがナポルトの眞面目之より
後大和民族の眼孔に映影し來たるを得ん歟。

文學博士重野安釋先生題辭 犬塚敏三郎君著

先賢幼時言行錄

全一冊洋装
大判美本
正價拾五錢
郵便税四錢

總論●立志●孝悌●剛毅●穎異上●穎異下●進歩●心術●學問●
詩賦上●詩賦下●技藝●附錄

